
アゼリアの恋

夕氷嘩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アゼリアの恋

【Nコード】

N4376C

【作者名】

夕氷嘩

【あらすじ】

薫^{かおる}にはずっと片思いしていた幼なじみがいた。失恋し、ひたすら胸の中に隠し続けてきた恋心。溢れ出す前に、この想いを伝えそうになる前に、叶うことのないこの恋に終止符をうつべきですか？ちよっぴりシリアスな薫の恋物語です。

* 登場人物紹介 *

登場人物は随時、更新していく予定です。（本編内容ネタバレ有り）

* 波風 薫ナミカゼ カオル：17歳の高校二年生で本編主人公。教室はAクラス。男前で男女共に人気があるが、本人はあまり自覚なし。女子バスケット部部長。 昂が好き。

* 楠原 昂ナンバラ コウ：17歳の高校二年生。学校で1、2位を争う超モテ男。薫の幼なじみで、男子バスケット部部長。 薫と同じクラス。

* 麻田 理子アサダ リコ：17歳の高校二年生。薫の親友で、バスケット部副部长。 薫と同じクラス。

* 暁 直哉アカツキ ナオヤ：17歳の高校二年生。 昂と同じぐらいの長身で割と整った顔の持ち主。 昂の親友で、男バス副部長。 薫と同じクラス。 基本的には無口な筈だが、薫とはよく話す・・・？

* 久我山 裕樹クガヤマ ヒロキ：17歳の高校二年生。 理子の彼氏。

* 櫻坂 亜美サクラザカ アミ：16歳の高校二年生。 男バスマネージャーで、昂の彼女らしい。 通称「ウザザカ」。

* 榎本 勇エシモト イサム：27歳独身。 女子兼男子バスケット部顧問。 適当でいい加減な性格だが、バスケはめっちゃくちゃ上手いらしい…？ 通称「かつしー」。

プロローグ

私とコウは物心つく時からずっと一緒だった。家が隣合っていたのもあるせいかな家族ぐるみでの付き合いだったから、一緒にいる時間が多くなるのは必然的と言っても過言ではないと思う。幼い頃は朝から晩まで肌が真っ黒になるまで毎日2人で遊んだし、一緒に悪戯してしょっちゅう母親にこっぴどく叱られたし、時にはケンカした事もあった。寝るときでさえずっと一緒だった気がする。私たちは世間一般で言う「オサナナジミ」というヤツなのかもしれないけど、もともとお互いに兄弟がいなかったのと私が男勝りなのもあって、もはや兄弟同然に育ってきたから特別視し合うこともなく。

私とコウがどこかよそよそしくなり始めたのはいつからだったんだろう。記憶は曖昧だけど、中学に入ると男子は男子で女子は女子でつるむようになり、俗に言う「思春期」に入った私たちが昔のようにならなっても一緒に過ごせるはずもなかった。気がついたら疎遠になっていた、という表現が一番ぴったりくるかもしれない。まあ、これも少女マンガとかによくある「オサナナジミ」の現象の1つなのか？と思うことで、どこか寂しく思う気持ちを無理矢理胸の中に閉じこめた。

私がコウへの恋心を自覚したのは中3の時だった。まあ、同時に失恋したようなものだったけどね。確か夏休みに入る前の頃だったと思う。

空が夕焼けに包まれ、いつもの様に部活が終わり友達と皆で帰ろうと校門を出ようとしたときの事だった。

「ねえ、あれっ！！」

1人の女の子が何かに気付き、慌てて校舎の裏庭の方向を指さした。ああ、この時ばかりは片目だけで視力1.7ある自分の目をどれだけ本気で恨んだことだろう。

次々に「それ」に気付いた女の子達が小さく悲鳴をあげる。

裏庭に続く木の影で重なる男女のシルエツト。女の方はどうやら後輩みたいだけど、男の方は私が良くも悪くも知りすぎた相手だった。

「あれって楠原君だよな！？やだあーっ、楠原君って彼女がいたの！？」

「あんなところでキスしてるなんて大胆だねー。さすが！」

「あつ、女の方、楠原君の頭に手をまわしてる」

皆なんだかんだ言っただけで興奮しながら2人に目が釘付けになってしまっている。

何か心の中で壊れる音がした。

目をそらしたくてもそらせないまま、ただ2人が深くキスしている姿を呆然と見つめていた。言い様のない焦燥感が押し寄せてくると共に、深い痛みが胸を襲う。

わたし、コウの事が好きだったんだ ……

「オサナナジミ」という事でどこかで夕力をくくっていた。どんなに離れても結局コウは自分の事を待っていてくれる気がしていたのだ。だからこそ昔のように一緒にいられなくても耐えることが出来たのだろう。だけど私は何を一体証拠にそんなバカなことを思っていたんだ？いつのまにかコウはぐんと背が伸びて格好良くなってモテだして……。

とっくの昔に遠いどこか知らないところへ行ってしまったとい

うのに。コウにとって私はただの「オサナナジミ」でしかなくて、
「オサナナジミ」なんて何の枷にもならないというのに。
無意識のうちに「すごいねー」とか言って皆と話を合わせていたけ
れど、心は張り裂けそうになるぐらい悲鳴を上げていた。

ワタシヲドコニモオイテイカナイデ

.....

中三の夏、失恋が決定した瞬間だった。

「6番と11番マークしてっ、がら空きになってる!」

「パスこつちあいてるよっ」

「今だっ、スリーうって薫^{カオル}!」

絶妙なパスが理子^{リコ}から回ってきて、言われるままにシュートを放つ。吸い込まれるように、ボールが「シュツ」といい音を立ててネットの中に入ると同時に「ピーツ」と終了を告げる笛が体育館に鳴り響いた。

「きゃーっ、薫すごい!! ナイスシュート!! あんな土壇場でよくスリーポイントシュートが決まるよねっ、もう天才!!!」

「理子こそナイスパス! 入ったのはたまたまだって。理子のパスが良かったからだよ」

理子のパスはスピードがあってカットしにくい上に、的確に胸のちようど真ん中にパスが来るからシュートがすごくうちやすい。おまけに指示も的確だから、迷わずにシュートをうつことが出来るのだ。

微笑んで理子にそう言うと、理子は不自然に私から目をそらした。

「理子?」

「あーもあ……だからその笑顔は反則だっばあ……」

「え? 何?」

「なんでもないですよーっ、たく、天然ってホント困る!」

「は?」

理子が何が言いたいのかさっぱり掴めない上に、なぜか逆ギレまで

されている。理子が考えてることは時々よく分からなくなる。

理子こと麻田^{アサタ} 理子は私、波風^{ナミカゼ} 薫^{カオル}の親友で中学校からの付き合いだ。身長は160センチよりあって、長い茶色い髪を後ろでポニーテールに結っていて可愛い顔をしていると思う。少し童顔のように見えるときもあるが、どっちにしる黒髪でベリーショートの私なんかじゃ比較にならない可愛さだ。

「薫っ、理子っ、ナイスコンビネーション！！してやられたって感じっ」

「ホントホント、薫ってばかっこよすぎだから！もう頼もしすぎますよ、キャプテン！！」

理子と話しているとチームメイトの子達が駆け寄ってきてボトルとタオルを渡してくれた。長時間ずっと動き続けてたせいかとんでもない汗の量でTシャツがびしょぬれだったから助かった。今更ながら喉がからからだった事にも気がつく。てかそこまで大げさに誉められるとかえってこっちが恥ずかしくなるんだけど…。汗をタオルで拭いながら私が苦笑すると、なぜかうっとりとした視線が集まってきた。

……………な、何だ？

「本当にはにかんでも絵になるよねー薫って…」

「汗もしたたるイイ男、じゃなくて女だけど！なんか美少年相手に自分がイケナイお姉さんになっちゃったような錯覚を覚えちゃうよね」

「分かるわかる〜！！美人な上にかっこいいしねえ」

いつのまにか周りに集まってきた一年も、こくこくと頷きながら何

故か同意している。

もしもーし、全くもって意味が分からないんですけど……。ここはどこぞの星ですか？むしろアレですか？私の方が異星人なわけですか？

すると話を打ち切るように、理子が「パンパンッ」と勢いよく2回手を叩いた。

「はいはい！皆の気持ちはすごくよく分かるけど、とりあえず部活終わらせよ！まだ早いから男バス見れるよー！」

その言葉を耳にするや否や話を打ち切って皆黙ってさっさと片づけを始め、着替えに更衣室へ向かう。その切り替えの良さには毎度の事ながら感服してしまう。浮き足立つどころか何故か怖いぐらいに皆顔が真剣になってるし。

私が思わず吹き出すと、理子がニヤニヤしながら近づいてくる。

「やっぱりアレよねー。うちの学校って何故か男バスにイケメン集まってるしね。特に楠原ナンバラがいるし皆はりきるわよ、そりゃー」

「あー…まあ、確かに……ね。学校の女の子達も放課後よく男バス見にいたりしてるしね」

うちの学校には体育館が1号館、2号館と2つあって、2つの体育館は渡り廊下で繋がっている形になっている。1号館が女子、2号館が男子と決まっっていて日替わりでバレー部と交替して部活をしているのだ。おかげで体育館を男子とハーフ（半分）で使うこともなくのびのびプレーが出来て使いたい放題だから良いんだけどね。

「そうねー、ここにいても2号館から歓声が聞こえるし。いやあ盛り上がってるな〜」

耳を済まさなくとも自然に女の子達の黄色い声が耳に届いてくる。

私と理子はお互いに顔を見合わせなんとなく笑い合つと自分達も更衣室へ向かった。

男子のバスケの練習の雰囲気は相変わらずで（女子生徒たちの応援のおかげもあるかもしれないが）めっちゃくちゃ盛り上がっていた。キュッキュとシューズと床がこすれる音やボールを奪い合う激しい音、男子の低い掛け声や女の子たちの声援が体育館内に響き渡っている。

「楠原くん！！きゃあつ、今こっち見たよ！！」

「がんばれえ！楠原くんっ」

プレー中にやはり一際目立つのはアイツだった。

華麗なステップでダンクを1本、2本とどんどん決めていく。シュートを決めた後も、女の子たちにモデル顔負けの笑顔をふりまいて余裕を見せている。皮肉な事に、汗一つかいていないように見えるのは気のせいでも何でもないだろう。アイツの爽やかな笑顔に声援が飛び交い、女の子たちのテンションはもはやピークに達していた。

「うーん、さすが楠原。毎日すごい人気だねえ」

理子がそんな様子を見て感心したように呟いた。

はあ……ほんとに。

なんでこんな奴なんか……

思わず小さく溜め息が漏れる。

ホントに私は何で今だにこんな奴を好きでいるんだろう。

絶対に叶うはずなのに……私も大概諦めが悪いな。

180センチ以上ある高い身長に、無造作にはねている柔らかかそうな栗色の髪。

男バスでキャプテンをしていて更にそこに見た目麗しい男っぽい顔立ちがおまけとしてついてきたなら、女の子たちが放つとくはずもない。

誰に対しても社会的で明るく男子からも支持を得ていて、まるで太陽のような存在である楠原昂ナンハラコウは言わずとも学校内では有名人で学校の1、2位を争う「超」がつくほどのモテ男だ。

本当にこの男と昔（子供のころ）一緒に遊んでいたのかとそれさえ疑わしくなってくる。

練習を終えると待機していた女の子たちが、待つてましたと言わんばかりにわつと男子たちに詰め寄った。お菓子やらタオルやらボトルやら……中には（何故か）感極まって涙している子もいる。ちゃっかり女子バスの子達もまざってるし。

周りにわんさか女の子達を引き連れている昂とふと眼が合った。

ドキンッ

ああっ、もう！

中学生じゃないんだから、典型的少女マンガみたいに素直に反応しないですよこの心臓！！

必死にポーカーフェイスを保とうとしていると、昂が近寄ってきた。

「よおー薰。もう女子バスは終わったのか？」

「あ、ああ、うん。相変わらずだね、昂は。やっぱり汗かいてない」「ん？そんな動き回ってないしな」

嘘つけっ!!

一般人がアンタと同じ量運動したら絶対へばって吐いて死ぬからっ
!!!!

はつきり言っつて昂の運動量は尋常じゃない。

他の部員と比べてもそれは歴然の差で。試合中でも、昂のあの動きがあるからこそスムーズに試合が運ぶのだろう。

それなのにあの量で「そんなに動き回ってない」になってしまつとは……ホントに化け物なんじゃないかと思わず思ってしまう。

高2になって私が女子バスの部長、昂が男バスの部長に選ばれてから一緒に仕事をする機会が増えたせいか、徐々にお互いにまた話すようになり今では昔のようにまでとはいかないが「友達」程度の関係には修復した……と言えるぐらいにはなっていた。

それが嬉しいと私が感じてるなんて、向こうは微塵も気付いてないだろう。

ん……？

何か見られてる？

視線を感じ周りに目を向けて思わずぎよっとする。

先程まで昂にはりついてた女の子達が、なぜか3メートルほど私達から離れて黙って見ていた。

ああ、そっか……

ファンの子達にとつたら私なんか昂と一緒にいて面白くもなんともないよね、そりゃあ。

ちよつと榎本先生に部活が終わってから呼ばれてたんだつた。これを口実に……

「こ、昂！ごめん、そういえば私槿本先生に呼ばれてたからもう行くね」

「えっ、マジ！？俺もかつしーに呼ばれてんだった。すぐ着替えるから一緒に行こうぜ。着替え終わるまで待つてるよ」

「だああああ~~~~~っつ！！！！むしろ逆効果!？」

私が返事をする前に昂は走って更衣室へ向かって行ってしまった。

あー……女の子達の視線がイタイ。

今回は不可抗力ですってばー…

隣で何故か理子がクスクスと笑を堪えきれずに笑い始めた。

「あー、ホントに薰って鈍感だよねえ」

必死に冷静な素振りをしようと脳内がパニックっている私には理子吹きも耳に入らない。

当然のことながら、遠目にそんな様子を見ていた女の子達がこんな事を言っていたなど露知らず。

「…なんかあの2人が並ぶと中世の貴族様みたいよね。私、いま平民の気分だわ」

「私も私も…思わず見惚れちゃったよ。イケナイ美少年2人組の図みたいでドキドキしちゃったあ〜!!」

「うん、なんていうかあ目の保養よね、ホヨウ。波風さんなんて女の善なのに…」

『ねえ~~~~!!』

女の子達は口々にそう同意しながらそれぞれ脳裏に2人の神々しい姿を思い浮かべ、ほうっ……とうっとり気分で溜め息をついたのだ。
った。

『失礼します』

昂と一緒に職員室に行き中を覗いてみるが、見渡す限り樫本先生の姿は見あたらない。

「あれ、なんでかつしーいねえんだ？」

「え？だって部活終わったら来いって言ったのは先生だよ？いな
いわけないよ」

「だって現に見当たらねーじゃん…あつ、ちよつと、まつもつちや
ん！」

ちよつと目の前を通りかかったところを昂が声をかけた。

”まつもつちゃん”とは我らが担任の松森美代子先生の事で（年齢不詳だが）見かけは40代のなかなか美人な面白い姉御肌の先生だ。長い髪を後ろでお団子にしているフレームなしのお洒落な眼鏡をかけている。

まつもつちゃんの眉間にぐつとしわが寄った。

「ちよつと、楠原！アンタ、先生に対して”まつもつちゃん”なんて慣れ慣れしく呼ぶんじゃないよ」

「えー？だって今更じゃないスカ。皆呼んでんだし」

「アンタ言うならせめて私の陰で言いなさい、陰で。じゃなきゃ最低限の教師の態度として示しつかないじゃないの」

「は？それこそ今更無理　　い痛っ！！」

ばこんとイイ音が教員室に響いた。

うわぁー…痛そう…

今間違いないと思いつきりぶったな、まつもっちゃん……

昂は「ありえねー本気で叩きやがった」とブツブツ言いながらまつもっちゃんに叩かれた頭をさすっている。

「あーもうアンタじゃ話にならないね。薫、教員室に何か用があつて来たんでしょ？どうした？」

「え？ああ、ハイ。榎本先生に呼ばれてるんですけどいらっしやらないみたいで…」

「榎本先生？さっきまでそこでコピーかなんかとしていたいた！榎本センサー」 あっ！

ちょうど教員用のドアからぬつと背の高い男が姿を見せたところだった。榎本先生はまつもっちゃんの声に反応し私達に気が付くと、片手を軽くあげて

「すまん、コピー機の調子がどうもおかしかったから業者の人呼んでたんだ」

と言いながらこちらへ向かってきた。

「で、どうした二人揃って。なんか用か？」

「何言つてんだよかつしー…かつしーが呼んだんだろ？」

「ああ、そうだったそうだった。色々忙しくてすぐ忘れちゃうんだよなー。来週の合宿の件でお前ら二人を呼んだんだよ」

『えっ！？合宿！？』

昂と私が同時に驚きの声をあげた。

「は！？聞いてねえよかつしー！なんでいきなり”合宿”なんて事になってんだよ！」

「そうですよ！しかも来週ってすぐじゃないですかっ！！」

そうなのだ。

バスケ部の顧問は女子も男子もこのカシモトヤサム榎本勇（27）がやっているのだが、去年は合宿なんていう気配は微塵もなく話もないまま一年が過ぎてしまっていた。

それなのにいきなり合宿ってなにっ！？

しかも来週！？

声を荒らげて反論する私達に教員室にいる先生達が何事かと顔を覗かせている。「まあ、とりあえず落ち着けよお前ら」と榎本先生が刈り上げた頭をポリポリかきながら宥めるように言った。

これのどこが落ち着いてられるわけっ！？

何悠長なこと言ってるんだこのオッサン！！！！

暢気に笑っている目の前の顔にもはや苛立ちは頂点に達しそうになっていた。昂は怒りを越えて呆れて物が言えなくなっているようだ。

「去年はお前達が入部したてだったから知らなかっただけで、たまたま合宿所に空きがなかったから行けなかったんだよ。だけど今年は俺の知り合いがちょうど経営してる旅館を急に借りれることになったから、こんなに報告すんのが遅くなっちゃったけど。悪かったな」

『……………』

あんなに興奮して大声を出してしまった自分が恥ずかしい。
なんて大人げない態度をとっちゃったんだろう。

私は申し訳なさが胸にとっと急に押し寄せてきて先生の顔を見れず
俯いた。 昂もどこか気まずそうに先生から視線をそらす。

「しかも聞いて驚けよ。おまけに近くにはコートが二面ある新設の
体育館と海も付いてくるぞ」

『…ええっ!!?!?』

新設の体育館に海っ!?

俯けていた顔を思わずぱつと上げる。

ちよつと待つてよ! すごいっ、これ以上合宿に適した場所なんてな
いんじゃない!? 前言撤回!! 先生、散々酷いこと言ってきて(口
には出してないけど)ごめんなさい!!

心の中でさりげなく謝っておく。 昂の様子を横目で伺うと、嬉しそ
うに目を輝かせてこれ以上はないというほど喜んでいるのが分かる。
顔に浮かべている少年のような笑顔に見惚れてしまった。

あーあ…絶対女の子達この顔見たら騒ぐんだろーな…

私は小さく苦笑した。

「すげえなかつしー! 俺思わず見直しちゃったよ! 珍しくかつしー
にしては殊勝な心がけに涙出そうになつたし」

昂が満面の笑顔で言う。

…って、遠回しにすごく失礼なこと言ってるし……

気付いてないなこりゃ……

鈍いのか鈍くないのかイマイチ分からないが、先生は期待していた反応が返ってきたからか「そうだろそうだろ？」と満足そうにした顔で笑みを浮かべた。

それから先ほどから抱えていたファイルから紙を二枚抜き出すと、そのまま私達に一枚ずつ手渡す。

「何だこれ」

”合宿事前の手引き”？」

「これから今週中にやんなきゃなんねー事だ。そこに書いてある通りなんだが、かいつまんで言っとくと、まずバスケット部全体での説明会。同時に合宿の出席人数の確認だ。保険証のコピーも集めとけ。あとプリント全員に配んなきゃなんねーからコピー機が直り次第人数分コピーして、ホッチキスでまとめる作業、体育館が近くにあるつつてもまだ予約した訳じゃねーからその手配と、ああ、あとボールとボトルとテーピングの買い出しにも行かなきゃ駄目だな。残りはリストに載ってる通りだ。大変だとは思うが、俺はお前ら年の割にしっかりしてるし信用している。だから忙しい俺の代わりに任せることにした！」

「だから有り難く思えよ」なんて台詞が続きそうな余韻を残して長々とそう言つと、はははと笑いながら私達の肩をぽんと叩いて、榎本先生はその場を軽やかな足取りで去って行ってしまった。

とんでもないことを最後の最後に言い残され、私達は呆然としてその場から動けなくなっていた。

「あ〜〜っつ！！まじありえねえ、かつしーの野郎！！何だよこの半端ない仕事の量はっ！！明日からまじ死ぬって、俺ら」
「本当に…少しでも先生のこと見直した自分が馬鹿だった」

学校からの帰宅途中

……

私と昂の家は学校から電車で二駅、歩いて10分のところにあり、勿論今でも引越すなんてこともなく家は昔のまま隣同士なので久しぶりに一緒にこうやって帰っているわけなのだが……
せっかく昂と帰れる貴重なチャンスだというのに、どっかの誰かさんのせいで台無しだ。

帰り道は文句&悪口大会で大いに盛り上がる事になってしまった。

20

まあ、別に甘い空気なんてはなから期待してなかったけど。
期待したところで昂には彼女がいるから、どうかなるわけでもないしね。

昂の彼女は相変わらず高校に入ってからもころころと変わってるみたいで、今は噂によると男バスのマネージャーと付き合ってるらしい。何だかんだ言っつてしっかり傷ついちゃってる自分に腹が立つ。少なくともこの想いに気付くまでは、こんな隠れ乙女キャラみたいじゃなかったのにさ…

いっその事告白でもして派手に玉砕してやろうとまで考えたんだけど、最近やっとなれた「友達関係」を同時に失ってしまうのは正直怖くて出来ないでいる。

ていうか、私なんか告白したらそれこそ永遠に語り継がれる笑い話になりそうだし……

「……い、おい！…薫？聞いてるのか？」

「へ？ああ、ごめん。なに？」

「どうした？珍しくお前にしちゃぼーっとしてるけど…」

「……そう？先生への文句が溜まりすぎちゃったのかも」

くすつと笑ってごまかして見るが、昂は訝しげに私の顔をじいっと見ている。

そんな顔をしていても格好よく見えてしまうのだから憎らしい。本気で人間って不公平だよ、神様。

「ほらっ、明日からどうする？部活終わってから作業するしかないよね？休み時間って10分しかないし、昼休みは昼練あるでしょ？」

私は負けじと目をそらさずになっこり笑う。

顔がきつと赤くなってるのは暗いしバレてないよね？

「……あ、ああ。部活はいつも大体6時ぐらいに終わるから、8時位までは居残れるんじゃないか？そこはかつしーに交渉すればなんとかなるだろ。」

「そうだね。じゃあ買出しは？いつ行く？」

「ボールにボトルにテーピングだっけ？二人じゃ絶対持ちきれないから麻田と暁アカツキに手伝って貰おうぜ。薫は？いつなら行けんの？」

暁とは男バスの副部長の暁直哉君のことだ。昂並みに高い身長と割といい顔をしているので、昂と一緒に並ぶと妙な迫力があったりする。比較的いつも無口な人かと思ってたんだけど、話してみると結構面白い人で最近ではクラスも同じだしよく話す事が多くなったかな？

「私は基本的にはいつでも大丈夫だよ。学校帰りでも平気だし。だ

けど部活帰りに行くのも疲れそうだし今週の日曜日とかはどう？
昂は大丈夫？」

「ああ、俺はそれでいいよ。じゃあ日曜日にしようぜ。暁には伝えておくから」

「分かった。私も理子に伝えておくね」

気付けばいつのまにか家の前まで来ている。

「じゃあ、また明日な。色々大変だけどぼちぼち頑張ろうぜ。かっしーをびっくりさせるぐらいの勢いで」

「あはは！うん、がんばろー。じゃあまたね」

別れの挨拶を言い合つと、お互い自分達の家に入つていった。

「ボタン」と玄関の扉を閉めてずるとしやがみこむ。

はあああ~~~~緊張した……

2人きりだったの本当に久しぶりだったからな？もしかして小学校以来？

顔に手をあててみるとやっぱり……肌が熱くなっているのが分かる。

私は落ち着こうと一息吐くと、今までの空気を振り切るかのように「ただいま」と大声を出してリビングへと向かった。

翌日学校に行き、朝練が終わって教室に向かう途中で早速理子に話を切り出してみると快く了解の返事をくれた。

「ふう〜ん、でもお邪魔じゃない？」

「邪魔？」

「そうだよ！だって私と暁君がいなかったら楠原とふたりつきりで日曜日にデートだったって事になるわけでしょ？なのによいのかなあ〜？なんて思ってみたり」

「はあっ！？」

デート！？何を言ってるんだ！？

ついでに付け足しておくとして理子には何故か私が昂の事を好きだったことがばれていたりする。何で分かつちゃったんだろ？

そんなに私って分かりやすい態度を気付かぬうちにとってしまったているんだろ？

「きゃああっ、薰ったら可愛いつ！！顔真っ赤になってる〜！ホントに薰っていつもクールな癖にいきなりこんな顔するなんてそのギャップは反則技だよ〜！！楠原もこの顔見たら絶対抱きしめなくなっちゃうって！！」

「だっ……！！？そんな事あるわけないよ！！！大体アイツ彼女いるし」

「彼女？ああ、男バスマネージャーの『ウザザカ』の事？」

「う、うざざか……？」

「そうっ！私ホントあいつのぶりぶりした態度駄目なんだよね！マネージャーの癖に仕事は全然出来ないし、その上楠原に対する態度は他の部員と天と地の差って言うぐらい違うし！女子の間でもすごい嫌われてるから、ウザイってことで櫻坂サクラザカの名前から通称『ウザザカ』って呼ばれてるんだよ。」

「へ、へえ〜……」

知らなかった……女の子って怖いかも……

「まったく、楠原の奴もホント趣味悪いよね。なんであんなのと付き合えるのか理解出来ないわ。私だったら絶対薫を選ぶのにな〜！」
そう言いながらぎゅっと理子が私に抱きついてきた。

「ちょ、ちよっと理子っ……こんな事してたら裕樹君^{ヒロキ}がヤキモチ焼いちゃうよ？」

それに廊下でこんなことをしてたら目立ってしまう。

必死に理子の巻きついてくる腕を離そうとするが、理子は離れる気配を見せるどころか困った事に更に腕に力を入れてくる。ついでに裕樹君とは同じクラスの理子の彼氏のことだ。

ちょ、ちよっと理子……

「ひろきい〜？いいのよあいつの事は放っておいて〜」

うわ……すごい言われ草だよ、裕樹くん……

「にしても薰って無駄な筋肉がついてなくて華奢ですらっとしてる割には、胸がとんでもなく大きいんだよね。着替えるときにいつも思ってたけど。」

「は？え、ってちよっと……理子っ……！……何やってんの……？」

胸を触られて慌てて体をひこうとするがあっけなく阻止される。

だからここ廊下だってばっ……！！

てかつわあああ〜っ、皆見てるしっ……！！

時はすでに遅し。

案の定いつのまにか注目の的となってしまうている。

「薰ってEカップはあるわよね？ホントに羨ましいわあ〜抱き心地もめちゃくちゃいいし」

ホントにもう勘弁してください、理子さん…

バストのサイズまで廊下でさらりと暴露され、恥ずかしさに耐えられずもはやこの場から消えたくなった。

抵抗する事も忘れ、じっと耐えていると突然後ろから、

「おい、いい加減そこまでにしといてやれよ。麻田」

と聞き慣れた声が聞こえた。

「昂っ……………!？」

廊下がざわめく。

振り返ると予想通り。喜ぶべきなのか悲しむべきなのか…昂の姿があった。その後ろには暁君もいる。

毎度のことながらこの2人はやはりどこか異質だ。廊下に姿を現した途端に空気ががらりと変わった。

いわゆる芸能人のオーラというもの？マンガとかで言うならカッコいい男の子の周りにとんでるキラキラしたやつ。ほら、よくいるじゃん。その場にいるだけで目を引く人って。

廊下にいる生徒も教室にいる生徒も目が自分達に釘付けになっているという事実を彼らは自覚しているんだろうか？

……………てか冷静に分析なんかしてる場合じゃないって自分!!
むしろこの2人が(正確に言うと1人だけ)声をかけてきてくれちゃったおかげで状況はますます悪化してるから!!
あ~~~~っつ、もう!!!だから目立ちたくないんだって!!

このまま速やかに通り過ぎてくれることを願わずにはいらなかった。

だがそんなに事がうまく運ぶわけもなく……………理子は私から腕を離すと、にっこりと微笑んだ顔を私の背後に向けて、

「あれ〜？誰かと思えば楠原じゃない。どうしたの？何か用でも？」
と、どこか挑発するような口振りで声をかける。

セイセイセイ……（古い）ちょっと待って理子さん！！
なんで喧嘩腰？

「うん？どっかで見かけた顔が廊下のだ真ん中でレズってるから友人として軌道を修正してあげようと思ったただけだけど？」

昂も曇りのない笑顔で答える。

「ってオイ！！なんで昂まで挑発にのってるわけ！？」

「あらあ……。それにしちゃあ目がとても友人を気遣ってくれるような優しいもんじゃなかった気がするけど？」

「なんだ、俺に優しくしてほしいかったわけ？お望みならばいくらでも優しくしてあげるよ？」

バチバチバチ…まさに効果音はこんな感じ。

お互い笑っていても何故か挑むような目つきで睨み合っている。

な、なんでこんな事になってるの！？

助けを求めるように暁君を見つめてみたが、暁君はかぶりを振っただけで2人を半ば呆れたように見ている。

なんなんだこの状況は……

さしずめ縄張り争いしている犬2匹と無力な蟻^{アリ}2匹？むしろ縄張りに入っただけで踏みつぶされそうなんですけど（汗）周りの生徒た

ちもはらはらとしながら、2人の行く末を見守っている。

はあぁ〜……

なんかすごい面倒くさくなってきた気がする……

いつその事この2人を放置して蟻らしく静かに退散してしまおうと目論んでいると、

「そこにいるの　　！！全員早く教室に入りなさいっ！！」

といきなり廊下に鼓膜が破れる勢いで大声が響きわたった。

「…っ！？まつもっちゃん!？」

「あんたたちっ、チャイムとつくに鳴り終わってんのよ！！いつまで待たせる気なのっ」

ぶんぶんと出席簿を振り回しながら廊下にいる生徒たちに怒声を次々と浴びせる。

昂と理子の冷戦状態が中断された事にほっとしながらも私達は慌てて自分たちの教室に戻った。

「ちよつと理子！！なにやってんの!？」

朝礼が終わって理子に詰め寄ると、理子は気まずそうに笑いながら

「ごめんごめん。だってあまりにも楠原が面白い反応するからさー、調子に乗っちゃったよ」

と謝ってきた。

「もう…廊下で喧嘩始めるのだけは勘弁してよね」

「はあ〜い！以後気を付けます」

理子の隣の席の彼氏でもある裕樹君が（たまたま今回の席替えで隣になったというからすごい偶然だ）心配そうに理子をおろおろと見つめている。

「理子ちゃん…あんまり無茶しちゃだめだよ？」

「はいはい、分かってますってー。もうこれつきりだからさ。心配してくれてありがと〜裕樹」

「理子ちゃん……………」

うわっ……………！ラブラブ光線が目につきささってきて痛い。

ただでさえ暑いというのにこの2人は室温を更に上昇させる気がっ！見ていられなくて、しょうがないから一限目の英単語の小テストの勉強をしようと単語帳を開こうとしたら、

「波風さーん！呼ばれてるよおー！」

とクラスの女の子に言われた。教室のドアのところに行くと思知らぬ男子生徒が立っている。靴ひもの色は薄いブルーだから一年生のようだ。

誰だろう？後輩みただけど……………

「あの……何か？」

話しかけてみるが口ごもっていて何を言いたいのかわからない。心なしか顔が赤くなっている気がする。熱でもあるのか？

「だ、だいじょうぶ？顔が赤いけど」

ちよつとごめんね、と断つて私より少し背の高い男の子の額に手を当ててみるが特に熱はなさそうだ。

「うーん…熱はないみたいだけど。どうする保健室に行く？あつ、ていうか私に何か用があつたん……」

私は思わず吃驚して、言葉を途切れさせてしまった。男の子の顔がみるみる赤くなっていく。

「……っ、あのっ……今日の放課後、体育館裏で待ってます………！」

男の子は絞り出したような声でそれだけ伝えたと廊下を走り去って行ってしまった。

えー…っ…これっでもしかして……

「相変わらず鈍い上に罪作りなやつだよねー、薫は。今ので絶対後輩君イカしたな」

背後からの揶揄するよつな声に振り返ると、理子がニヤニヤと笑いながら立っている。

「あの後輩クンの態度を見れば一目瞭然なのにねー。クラスの子達も皆気づいてたのに、気づかなかったのは薫だけだよ。何度もこのパターンで呼び出されてんだから、少しは学習能力を身に付けなよね」

「はい……」

ごもつともです。

理子に反論など出来るはずもなく黙り込む。

はあ〜……………

自分のバカさ加減を本当に呪いたくなった。

「3ヶ月前に波風さんに助けてもらった日から……ずっと好きでした」

放課後。

部活前に体育館の裏に行くと、先ほどの男の子が待っていて想像していた通り告白された。

私はすっかり頭から抜け落ちてたみたいだけど、どうやら3ヶ月前の一年生の入学式の日には彼が迷っていたところを体育館まで案内したらしい。言われてみればそんな事をしたような記憶があるようなないような……

正直に覚えてないと伝えると、相手の男の子はがっくりとうなだれていた。

「ごめんなさい……私はあなたとは付き合えない……」

何度も繰り返してきた言葉。

相手の男の子は覚悟していたのか「そうですね……」と小さく呟くと弱々しく微笑んだ。

「あのっ……理由だけでも聞いていいですか？」

ああ、また同じだ。

「バスケット部の部長をやらせて貰ってるし色々忙しいから、かな。それに今は誰かと付き合つとか色恋沙汰に正直興味がないんだ」

何度も紡がれてきた嘘のコトバ。

本当の理由が言えないのは、この男の子を信じていないからではない。

言えるものなら今すぐにも伝えている。

私には好きな人がいるから。
昂の事がずっと好きだから。

言えないのは私の臆病な心がそれを妨げるから。
どこかからもしこの事が漏れて昂に伝わってしまったら？昂に「友達」という関係でさえ切り捨てられてしまったら、私はそのまま地面に立っていられる？

ずるくて情けないのは百も承知だ。でもどうしても自分が傷つくことを恐れて予防線を張ってしまう。

嘘のコトバを重ねていくだけ罪悪感が心に重くのし掛かる。

どうしたらいいの？どうすればいいのか分からない。
どうしたら……

「……そうですね。忙しいところをいきなり呼び出してしまったごめんなさい。話を聞いてもらえただけでも嬉しかったです。それじゃあ……」

男の子はそう言って少し小走りでこの場を去っていった。

本当に……

自分なんかを好きになってもらえたことは喜ばしいことなのかもしれないけど、「相手を振る」という行為は精神的にすごく疲れる。

私は重たい息をはあっと吐き出すと、体育館に向けて歩き始めようと足を踏み出した。

が、角を曲がるうとしたところで、

誰だろう？

人の話し声が聞こえてきた。

「……………つ……………ら」
「……………、……………な」

会話は途切れ途切れにしか聞こえなくて何を話しているのかまで分からない。

どうしよう。

こんなところで話してるぐらいなのだから告白かな？
何にしる聞かれたくない話であるに違いない。

困った……………こちらからでしか体育館には行けない。

腕時計に目をやると針は3時50分をさしている。話終わるのを待っているのは部活に間に合わなくなってしまう。

しょうがないよね。さっと通れば許してくれるだろう……………たぶん。

私は意を決して角を曲がった。

よしっ、このまま走り去れば……………

「……………っ!？」

目の前に飛び込んできた光景に息を呑む。

二年前の蓋をしていた記憶が脳内で突如呼び起こされた。

目の前で唇を合わせているのは紛れもなく……………

「はは……………」

濁いた笑いが口から漏れる。

ホントに私つついてないな……………

なんでよりにもよって、好きな人のキスシーンを2回も目にしなくちやいけないわけ？

偶然もここまで重なる逆と逆に笑えてくるよ……………

じりじりと心に焼き付けるような感覚が蝕んでいく。

なんでなの……………？

想いが届かなくてもいい。

友達のままでもいい。

そう分かっていても目の前の光景は私にとっては辛すぎた。

瞬きもせずただ黙って見ている事しか出来ないでいると、ふと目を開けた昴と目があった。

昴の目が驚いたように見開かれる。

女の子の方はちょうど私に背を向ける形だったから気づいてないよ
うだ。

「櫻坂」

昂が相手の女の子に呼びかける。

「もう部活始まるから先行ってて。俺、かつしーに用があるから。そう皆に伝えておいて」

「…イヤ。私も一緒に行くわ」

「いいから！早く行けって。お前マネージャーだろ？」

苛立ったように言う昂に諦めたのか私に気づかないまま櫻坂さんはしびしび体育館へと戻っていった。

昂は姿が見えなくなるのを確認すると、私の方へ向きを変える。

「なんで……ここにいるんだよ」

「ちょっとヤボ用で……ごめん、見るつもりじゃなかったんだ」

笑って平気なふりを装う。

ちゃんと今声が震えずに笑えているだろうか？

「薫……」

「ほらっ、かつしーに用があるんでしょ？早く行きなよ。私ももう行かないとマジで部活に間に合わなくなるし、行くね」

おねがいっ………！

これ以上もう話しかけてこないで………！！

こみ上げてくる涙を必死にこらえる。

私は昂の返事を待たずに昂をその場に残して体育館に向けて駆けだした。

「ちよつと薫……………今日どうしたの？ボロボロだったじゃん」

座り込んでいた私の頭に理子がタオルをかぶせて隣に座り込む。

「うん……………なんか調子が急に悪くなったみたい。ごめん、迷惑かけて……………」

本当に今日の部活は最悪な内容だった。

集中しようとも集中しきれず何度もぼろっとしてミスをしたし、シートだって一本も決まらなかった。

その癖皆にまで心配かけて……………ホント最低だな、私。
こんなんじゃキャプテン失格だよ……………

すると理子にいきなり両手で顔を掴まれ、理子の方へぐいっつと顔を向けさせられた。

「確かに薫の哀愁が漂った顔もかつこいいかもしれないけど…私は薫からそんなことが聞きたかった訳じゃない！」

理子の顔を見上げると、明らかに理子は怒っていた。

「もう皆帰したから、ここには誰にもいないよ？薫……………私じゃ頼りない？私には話せない？」

理子の顔が泣きそうになって歪んだ。

こんな顔を理子にさせたかったわけじゃない。

理子にここまで心配させて、気を遣わせて……………

ごめんね、理子。本当に最低だね、わたし。

ぼつりぼつりとさつきあつた事を話始めた。理子はじつと黙って聞いてくれている。ずっと我慢していたものがだんだんと堪えきれなくなり、とうとう溢れ出してしまった。

「ねえ……………りこ……………？わたしこのままっ、ここのこと、好きでいいの…？好きでいるのつらいの……もう、どうしたらいいのかわからないよお……………」

話終わってもずっと泣いている私を理子は何も言わずに時折頷いてはぎゅっと頭を抱きしめていてくれた。

ちゅんちゅん……………

頭のどこか遠くの方から雀の鳴き声が聞こえる。

「う……………ん」

引きずられるような感覚でゆっくり目を開くと、窓から差し込む日の光の眩しさに思わず顔をしかめた。
しぶしぶ枕元に置かれていた目覚まし時計に手を伸ばす。

「9時か……………」

日曜日。

とうとうこの日が来てしまった。

これほどまで待ち望まなかった日は今までなかっただろう、っていうぐらい。

携帯を開くと8時過ぎに理子から一通のメールが入っていた。

内容は、今日は無理してこなくていいからねと気遣うもの。

私は「大丈夫、行けるよ。ありがと」と短く返信すると、のそのそと起きあがった。

今日は約束の合宿の買い出しに行く日だ。

勝手に私情を挟んで行かないわけにはいかない。

……………あの日、再び昴のキスシーンを目撃してから昴を目の前にし

て今まで通りに振る舞うことが出来なくなった。
理子もそれを察して色々と庇ってくれたから、昂に昨日まではそんな様子を気付かれずにすんでいたと思う。放課後の仕事も理子が積極的に手伝ってくれて昂と2人きりにならないようにしてくれたおかげだ。

だけど今日はたった4人で行くのだ。

昂の顔を見ただけで感情に抑えがきかなくなってしまいそうで、どうしようもない不安にかられる。いつボロが出てごまかしがきかなくなるか分からない。

バレるわけにはいかない。

バレたらそこでゲームオーバー。

「友達」という関係の遮断の瞬間。

集合は駅前に午後1時だ。あと4時間近くある。

私はクローゼットに向かうと何着か服を引き出した。その中から適当にTシャツとズボンを選ぶ。

まあ、見て分かるように自分はこんなだし似合わないのも承知しているから、もちろん女の子らしいスカートだとかキャミだとかそんなものは一着も持っていない。

というかズボンの方が機能的だし動きやすいから楽だしね。

本当に私って女じゃないよなーと自嘲気味に苦笑しながら着替え終えると、カバンに財布と携帯だけ入れ、そつとドアを開けて廊下に出た。

廊下はしんとした空気が漂っている。

お父さんもお母さんも出掛けたのかな？

リビングに行くとテーブルの上に書き置きメモが残されていた。

.....

かおるへ

ちょっとママとパパは楠原さんのご夫婦と一緒に出掛けるので、もし外出するようなら戸締まりをしっかりとね！

帰りは夜になると思うから、もし夕飯を家で食べるんなら冷蔵庫のものを温めて食べてください

.....

.....はっ！？楠原さん！？

びっくりして手にしていたメモを凝視する。

だが何度読んでも間違はなくそう記されているわけで。

はあああゝゝまたなわけ？

思わずため息が漏れる。

うちの両親と昂の両親は昔からどっちもどっちっていうぐらいラブラブで両家仲が良かったから、いい年してダブルデートまがいのことをよくやっていた。

ついでに小さい頃はの間私は昂のもとへ預けられていたため、いつも2人で遊んで帰りを待っているといったような感じが当たり前になっていた。

私はもう一度深くため息をつく、窓の鍵をチェックし終え、足にサンダルを引っかけて外に出た。

ん？なんでこんな早くから出掛けるかって？

お忘れかもしれないけど昂と私は家が隣同士。

今までの経験からしても、昂はきっと流れで駅まで行くのに私を迎えに来ることになるだろう。

一緒に行く＝つまり2人きりになるということなわけで……………

それだけは避けなきゃならない絶対事項だ。冗談じゃない。

とまあ、ここまで頭をフル回転させて結果、先手をうつことにしたわけだ。

天気は上々。

夏らしい青く澄み切った空に、大きな入道雲が浮かんでいる。セミは合唱しているし、太陽はじりじりと肌を照りつけてきてじっと立っただけでも汗が服にしみてくる。

明日からもう合宿かあ……………

どうせ今から4時間も暇だし、明日の用意のものを買ってカフェでゆっくりでもしてればあつという間に集合時間になるよね。

よし、とひとりで勝手に頷くと、暑さを振り切ってデパートに足を進めた。

そろそろ、かな。

店内の時計で時間を確認したあと注文していたカプチーノを飲み干して席を立ち上がった。

今いるのは駅の近くにある喫茶店だから、ここからだとも5分もかからないはずだ。

勘定を済ませ、カランカランと音を立てる木製の扉を開いて外に出る。

人の波に沿って駅まで向かうと、駅前の広場は驚くほどたくさんの人でごった返していた。

うわっ……さすが休日だけあってすごい人……

ていうかあの3人をこんな状況で見つけられるのか？

だがそんな心配は杞憂に終わった。

彼らの姿は意外にもあっさり見つかったからだ。

うっ、すごい目立ってるし……

遠目にも分かる、人の群の中で長身のためにひょっこりと出ている昂と暁君の二つの頭が見えた。そこに理子がいるかまでは見えないが……あまつさえイケメン2人に、行き交う人々の好奇の視線は全てそこに注がれていた。

なんか……すごく行きづらいなあ、あそこ。
てかむしろ行きたくない気が……

わざわざ好き好んであの中に混ざる気はちつともない。一瞬、このまま帰ってしまおうかという考えが脳裏をよぎったぐらいだ。

だけど、こんなところでいくら考えあぐねていても邪魔になるだけでどうしようもない。

約束の時間も刻々と迫っている。

私は仕方なく人混みの中を縫うようにして目的地に向けて歩きだした。

「あつ、きたきた！薫！」

私に気付いた理子が手を振った。

「ごめん、来る前にちよつと買い物してたら遅くなっちゃった」

「だいじょーぶ、ギリギリセーフだよ」

暁君が「うつつ」と言って小さく手を挙げて声をかけてくれたので、私も

「うつつ」と返事を返した。

そして昂はというと……

「……………っ!？」

思わず小さく声が漏れた。

な、なんでこんなに不機嫌なオーラが漂ってるわけ……………!？

はっ!?

てか今思いつきり睨まれたし!!

すごい不機嫌そうに昂は私に一瞥をくれただけで、

「行こーぜ。誰かさんが遅かったせいで待ちくたびれた」

と吐き捨てるように言って、すたすたと勝手に歩き始めて行く。その後を「おい、待てよ昂」と言って暁君が追いかけていった。

……………ええっ!?

なんなの、そのあからさまな嫌みは!!

私が呆然として突っ立っていると、理子が肩を竦めて言った。

「もう来たときからあんな感じ。いやー参ったよ、本当に。初めてアイツのあんな姿を見たわ」

「なんであんな事になっただの…………?」

「知らないわよ、なんなのあの自己中っぷりは。あー、もうあんな遠くにいるし!今日はとりあえず薫のこと徹底的にアイツから守るから!とりあえず追いかけてよ」

理子はぐいっと私の腕を引っ張って、慌てて昂と暁君を追いかける。

なんだか先が思いやられる気がした。

着いたのは私が先ほど行ったデパートよりも大規模なところだった。

「はいはい！じゃあこうしよう！！楠原と私はスポーツ用品店に行ってる間に、薫と暁君は薬屋さんと湿布とかゴールドスプレーを買うつてことで！！それで買い物が終わったらここで待ち合わせして、メンバーチェンジしない？私、薫と行きたいところがあるんだよね。」

そっちも男同士で色々寄りたいたいところがあるでしょ？」

理子はそう提案すると、私に向けて片目を瞑った。

理子が気を遣ってそう提案してくれたんだと分かると、私も、

「そうだね、そうしよう」

と同意して頷いた。

「……………ちょっと待てよ。なんでそこで俺が麻田と一緒に行かなきゃなんねーんだ？」

「なによ、アンタが弱い女の子に荷物を持たせるわけ？」

理子がぎろりと昂を睨みつける。

「……………分かったよ」

昂は諦めたように目を閉じるとそのまま押し黙った。

な、なんか今の不機嫌な昂と理子を2人にするのは猛烈に心配なんですが……………

「じゃあ波風、行くか？」

「え？あ、う、うん。じゃあ理子また後でね」

昂の方は見ずに一旦2人に別れを告げると、少し後ろ髪が引かれる思いだった。が私と暁君は5階にある薬屋さんに足を向けた。

「えー…つと…あつ！あつたあつた！湿布つてどんぐらいいるかな？」

「どうだろ…俺ら合宿経験してないしどれぐらいハードか分かんないしな。でも皆足とか腰とか痛めそうだし、一応出来るだけ買っていこうぜ」

「そうだね…あーにしても明日が合宿なんて俄かに信じられないよ」

「確かに。かつしーもかつしーで終業式の翌々日から普通合宿やるか？って感じだよなあ。おかげで終業式の日も死んだしな」

そう言つて暁君は苦笑する。

本当に…土曜日の終業式の日は今思い出すだけでも反吐が出そうなくらい忙しかった。

結局、下校時刻が過ぎても仕事を全て完了させるために夜遅くまで死に物狂いで4人でやったのだ。

「あん時は本気で樫本先生のこと恨んだしねー…あつ、スプレー見つかった？」

「ああ、二泊三日だしとりあえず3本で足りるだろ。じゃあ後はレジに行つて終わりだな」

会計をして、買い物した袋をレジの人から受けとろうとしたら隣から暁君が手を伸ばして持っていかれてしまった。

「えっ、いいよ暁君！私持つよ？」

奪い返そうとしたら、ひょいと遠ざけられてしまう。

「いーって。波風女なんだしこういう時ぐらい甘えれば？それに、じゃなきゃ俺が何のためにいるか分かんないじゃん」

そう言っただけで暁君は滅多に見せない笑みを浮かべた。

だからいきなり女扱いされても免疫ないんだって……！！

思いがけない言葉に赤面してしまう。

暁君って絶対天然のタラシだよ……無意識っぽいし。

笑顔も女の子たちが見たら完璧に惱殺もんだしさ。

お言葉に甘えて荷物をもって貰うと、私は気恥ずかしいせいもあるけど「ありがとう」と聞こえるか聞こえないかの小さい声で呟いた。

「あれ？一階に行かないの？」

暁君は足を止めて何故か動こうとしない。

「……………」

「暁君？」

「波風、あのさ……………」

「え？」

「……………言いたくないんなら言わなくてもいいんだけどさ、昂のヤツとなんかあったりした？」

「えっ!？」

その声を上げて慌てて口をつぐむ。

「……………な、なんで?別になんにもないよ?暁君の気のせいじゃない?」

気が動転してることがバレないように、必死に冷静さを装う。

天然なくせになんでこんな時だけ鋭いんだ、暁君って!

背中に冷や汗が伝っていくのが分かる。

「そうか……………?」

「イヤ、ほんとだって。なんでいきなりそんな事言うの?びっくりするじゃん」

「……………悪い、俺の勘違いだったみたいだな。あんま気にしないでくれ」

暁君は気まずそうに頭をかきながらも、まだどこか腑に落ちない様子だ。

「う、ううん別にいいよ。気にしてないし。ほら、早く一階に行こ」

私は思いっきりうるたえながらも何とか取り繕って、暁君の背中をぐいと押した。

「ねえ理子……………」

「ん？なあに？あつ、この花柄も可愛いかも」

「……………なんでこんな所にいるんだっけ、うちら」

今、理子と来ているのは何故か4階にある水着売場。

この時期夏本番前という事で新作の水着がたくさん出ているせいか、水着売場は多くの客で賑わっていた。

「なんでって水着を買いに決まってるでしょ」

「いやいや……………だから何でそうなる？」

「薫が言ったんじゃない。合宿中に海行けるって」

「そうだけど、私水着ならもう」

言いかけたところで「ストロップ」と理子に言葉を遮られた。

「薫君、この私が当ててあげよう。君が持つてる水着というのはどこぞのスクール水着じゃないかね？」

えつと？理子サン。

その変な口調は一体……………

「そうだけど……………？」

スクール水着と言っても学校のじゃなくて、いわゆる本格的な水泳教室で習ってた時に着ていたヤツ。

シンプルなデザインが割と気に入ってたんだけど……………

するといきなり理子は何着かの水着を私の手に押しつけ、そのまま店員を呼ぶやいなや私を試着室に押し込んだ。

「ちょ、ちよつと!?!」

慌てる私に、理子は鋭い睨みをくれる。

「薫、アンタ男のロマンを壊す気!?!」

「は?ろ、ろまん?」

「そうよつ!!誰が海に行ってスクール水着をわざわざ拝みたいなんて思うの!?!そんなのは変態だけよ!男はねえ、水着姿になつてより一層輝く女の子たちに夢という名の希望をもって海にやってくるんだから!第一、そのイヤらしい体を“海”という絶好の場で解放しなくてどうする!?!」

「はあつ!?!」

ぎょつとして思わず理子を見つめる。

彼女は一体なにを言ってるのだ...?

「ほらっ、薫!諦めてさっさと着替えなさい。集合時間に間に合わなくなつてもいいわけ?楠原がさらに不機嫌になつてもいいついでにうなら話は別だけど」

うっ………

それはちよつと勘弁してほしい…かも。

結局言われるがままに(言いくるめられた感もあるが)水着をしぶしぶ試着することとなった。

が。

「……………っ!?!」

な、な、なにこの水着っ……………!?!?

鏡に映し出された自分の姿に唾然として口が塞がらない。

何でこんなに生地が薄いのっ!?!?っっていうかほとんどこれじゃあ胸が丸見えみたいなものじゃん……………!!下着なんか比べもんにならないってどんだけ!?!?ないない絶対ありえないって、コレ……………!!

「薰!?!?試着できた!?!?」

「無理っ!?!?てか絶対イヤだっ!?!?こんなを着るぐらいならスクール水着着たほうが10000倍ましっ!?!?!」

いや、むしろ死んだほうがマシだっ……………!!

さっさと脱いで着替えてしまおうとズボンを手に取るうとした瞬間、試着室のカーテンがぱつと開かれた。

「はっ!?!?ちよつと!?!?」

理子ってばなにやってんの!?!?

なんでカーテン断りもなく全開にしてるの!?!?着替えてる途中だったらどうするつもりなわけっ!?!?

理子の信じがたい行動に固まっていると、理子は下から上まで人の

体を勝手に眺め回してから、なぜが一人で納得したように頷いた。

「店員さん、この水着どう思われます？」

「え？アラー！すごいお似合いですよ！！お客様、すごいスタイルがよろしいからかしら。実はこの水着、着こなせるのはモデルぐらいじゃないかと雑誌でもとりあげられてるぐらいなんですよ。でもお客様ほどお似合いでいらっしやる方を初めて見ましわ」

店員もなぜか驚いたように見ている。

「ですよー、私もそう思います 他の水着を試着するまでもないな……………じゃあ店員さん、コレください！」

「はい、かしこまりましたー！」

もはや、反論の余地無し。

私が呆然として突っ立ってる間に、理子は手早く話をつけて結局水着を買い上げる事になってしまった。しかもいつのまにか自分の水着までちゃっかり買っている。

「じゃ、これは私が持って帰るね。薰のことだからわざと水着家に置いてきそっだし」

ギクッ。

す、鋭い……………！！

だめだ、やっぱりどう足掻いても彼女に勝てる日は一生来る気がしない。

有無を言わず理子は買い物袋を奪って、上機嫌で歩き始めた。

はあ……………
波風薫、完敗です。

「よしっ、じゃあ明日ね！あつ、二人とも買いだしたヤツ忘れない
でよー！」

「……………忘れねーよ」

「ああ。忘れたら話にならないしな。じゃあ、俺、バス停こっちだ
から」

「あつ、私もバスだ。じゃあ薫っ！明日朝7時半に学校前ね」

「……………あ。う、うん。頑張ろうね、明日から」

「うんっ！あゝっ、なんか今から緊張してきたあ！早く帰って早
く寝なきゃ。それじゃ、2人ともまた明日！」

そう元気よく別れを告げると、理子と暁君はバス停へと向かってい
ってしまった。

「……………」

「……………」

はい、この空気を一体私にどうしろと言うのですか、神様。

お互い顔も見合わせていないというのに、なんなんだこの重苦しい
緊張感あふれるこの空気は。

隣から嫌というほどちくちくと視線が浴びせられているのは分かっ
てる。

理子と暁君が行ってしまった方向をじっと見つめて、それに私が気
づかない振りをしてるだけだ。

なんとなく分かっている。

いや、分かりたくなかっただけなのかもしれない。

昂は怒っていて、しかもその怒りの矛先はおそらく私だという事を。

あー…一緒に帰りたくないぞ、非常に。

ただでさえ2人きりになることを怖れていたというのに、加えて昂のこの機嫌じゃ地獄の道へまっしぐらなのは言うまでもないだろう。

やっぱりアレだろうな…

今日、何も言わずに勝手に先に行ってしまったことを怒っているんだろう。

でもそれは仕方がないのだ。

バレるわけにはいかないのだから……

まあ、何も知らない昂からしたら傍迷惑な話なんだろうけどね。

でもここまで機嫌が落ち、さらに昂がそれを露わにするのは今まで一度も目にしたことがないというほど珍しい。

別に特に一緒に行くと約束していたわけでもないのに、そんなに気に障ることだったんだろうか？

気まずい沈黙が続く。

お互いそのままの状態で一步も動かない。昂も私を見ているだけで話しかけてこようとはしない。

端から見たら、なんとも滑稽な様子だろう。むしろ、不審者？

「あ、あのを」

あ〜っ！！

ダメだ、耐えられないっ!!

「私この後、用があるから先帰ってて　えっ!?!」

ここはやっぱりひとまず逃げるしかないと思って言いかけた時だった。

昂はいきなり私の腕を掴んで、

「ふざけんな」

と吐き捨てるように言つと、そのまま腕を力強く引つ張り歩き始める。

「ちよっ……っ、昂っ!?!」

「うるさい!」

抵抗してみるがまったくビクともしない。

そんな私の様子などお構いなく、昂は私を引きずるようにしてずんずんと歩調を早めていく。

掴まれた腕が痛い。

ちよっと待って……!!

なんで急にこんな事になってるの!?

「ま、待ってよ!なんでいきなり」

「……………」

慌てて反論する言葉も全てスルーされ、狼狽えていた私は昂が無言で放つ威圧感に押し黙り昂に付いていくほか無かった。

昂の家に着くやいなや、そのまま昂の部屋にまで引っ張って行かれ部屋の中に放り込まれた。

「……………っ」

ボタン、と大きな音を立ててドアが閉められる。

この唐突な予測不可能な事態にももちろん脳内はパニック状態だった。

何も言えず狼狽している私を、昂はちらりと見てから皮肉めいた笑いを見せた。

「お前さ、なんで俺が怒ってるか分かってる？」

「……………え？」

「気づいてないとは言わせないからな。俺がなんで怒ってるか分かるか、って聞いてんの」

「……………あ、アレでしょ。今日、私が先に昂に何も言わずに行っちゃったから……………ごめん。でもどうしても約束の前に行きたいところが」

「バンツ……………!!」

昂が言い終わらない内に、近くの壁を勢いよく叩きつけた。びっくりして昂の顔を見つめると、昂は苛立った表情を浮かべ、そのまま私を流し見た。

こんな昂、見たことがない

凄まじい気迫に思わずごくりと息を呑む。

「あのさ、俺が気づいてないとも思ってた？」

「な、なんの……………」

「ここ数日間。極力俺のことを避けてただろ？」

えっ……………！？

心臓がビクツとはねる。

な、なんで…………気づかれてるっ！！？

「上手く隠し通せてると思ってた？俺が鈍いからいけるっ？」

「……………」

「当ててやるーか。お前が俺を避け始めた原因を」

や、め…………

心にかんがんと警鐘が鳴る。

心の奥深くに閉じこめた枷が動きだそうとしている。

やめ、て、それ以上言わないでっ……………！！

「な、なんのこと？どうしたの、昂。今日なんか変だよ？」

いわないで……………！！

お願いだから……………！！

「お前と何年幼なじみやってると思ってるの？薫が俺を明らかに避けだしたのは、櫻坂との」
「やめてっつ！……！！！」

悲鳴のような金切り声を上げた。
もう、何がなんだか分からない。

こらえていた涙が気づいたときには溢れでていた。

ああ、とうとう枷が外れてしまったのか。

驚いた表情の昂が涙で滲んだ目にぼんやりとうつつる。

ははっ……そりゃそうだよね。

小さい頃から昂の前で泣いた事なんて一度もないんだから。

「はは……」

乾いた笑いが口から漏れる。

「昂はさ、やっぱり鈍いよ」

「……………は？」

「私が昂のこと好きだなんてこれっぽっちも思っていないんだもん」

一瞬、昂が固まったのが分かった。

これ以上ないくらい大きく目が開かれたのも。

驚くよね、そりゃあ。

隣の兄弟のような男みたいヤツがいきなり告白なんてしてくるなんてさ。

私は昂を無視してそのまま言葉を続ける。

「知ってた？私、昂に彼女が出来るたびに柄にもなくすごい落ち込んでたんだよね。この前、偶然昂のキスシーンに出くわしたときなんか心臓張り裂けるんじゃないかって思ったし」

知るわけがないだろう。

昂にとつたら所詮“おさななじみ”なのだから。

「……………つく」

嗚咽が漏れそうになり、必死に唇をかみしめる。

昂の迷惑なんて考える余裕がなかった。

せつかく”友達関係”にまで修復したのに、逆戻り、か……でもそれを壊したのは他でもない、自分だ。

「ごめん、昂。確かに避けてたよ、昂のこと。不快な思いをさせてごめん。見かけによらず、私って案外意気地なしなんだよね」

床に落ちていたバッグを拾うと、昂の顔を見ずにドアへと向かう。

昂が今、どんな表情でいるかも、どんな気持ちでいるかも分からない。

昂はただ私が避けていた理由を尋ねただけなのに、まさかこんな結果になるうとは思ってもみなかっただろう。

揺れる思考の中でそんな事をぼんやりと考えた。

「じゃあ、私帰るね。いきなりこんな事言っでごめん。あんまり気

にしないで忘れてくれればいいよ」

忘れてくれればいい、なんて虫が良すぎる話かもしれないけど……

私はそのまま昂のほうを振り返らずに、静かに部屋をあとにした。

自分の部屋に戻ってもせき止めることを知らないように涙だけが流れ続けていた。

昂に想いを告げてしまったという現実感はなかなか訪れてこようとはしなかった。

はあ、はあ、はあ、

もう汗はだくだくだった。

息を切らしながら全力疾走で学校に向かって走る。

すれ違う人たちが驚いて振り返っていくのが分かったが、今はそんな事を気にしている暇などない！

現時刻は7時32分。

集合時間はとつくに過ぎてしまっている。

ありえないっ……！

部長が合宿の日に寝坊するとか最悪だ！！本来ならば、30分前に学校に着いて自分が点呼をとらなきゃならなかったのにっ………！！

あのあと寝ようにも寝付けず、結局就寝につくことが出来たのは今日の朝方過ぎだった。

お母さんに「薰っ！はやく起きないと遅刻するわよ！」と叩き起こされて、重い体をずるずると引きずりながら洗面所へ向かい鏡の前に立って自分の姿を目にした途端、思わず絶句してしまった。

泣きはらした目は赤く腫れ上がっていて、しかも睡眠不足のためか目の下にははつきりと隈が出来ている。

この世のものでないような顔に啞然としてみると、お母さんは娘のそんな様子にも驚くこともなく落ち着いた様子で、「とりあえずこれで冷やしときなさい」と氷が入った袋を手渡してきた。

お母さんは普段はふんわりとした雰囲気をもっているのに、時々驚

くような鋭さを発揮する。今回も私に何かがあったという事は十分
なくらい察しているんだろう。ううん、下手したらその原因まで分
かっているのかも。

ただお母さんは気遣ってか問いただしてくるような事はしなかつ
たので、内心ほっとしていた。

そんなこんなで、そもそも起きたのがギリギリだったし目を冷やす
のに時間をかけていしまい、気づけばこの始末…というわけだ。

走っている内に段々と学校の校舎が見えてくる。

校門の前に目を走らせると、すでに皆バスに乗り込み始めているよ
うだ。

人の列がバスに向かってずらりと出来ている。

理子と暁君がバスの前で樫本先生となにか話し込んでいる様子が目
に入った。

あれ？ 昂がいない……………

もうバスに乗り込んだのかな？

ズキンと胸が痛んだ。

はあ……………

こんなときにまで昂のことを考えちゃう自分の図太さが本当に信じ
られないよ。

そこまで考えてはっと我に返る。

慌てて止まりかけていた足を動かしダツシュしてバスへと向かった。

「理子っ…………遅れてごめんっ!!」

私の声に背を向けていた体を驚いたように反転させると、そのまま「薰っ!!」と理子が勢いに任せてぱっと飛びついてきた。あまりの勢いにくっくとバランスが崩れる。

「もぉっ!!時間過ぎても薰が来ないから何かあったんじゃないかって心配したじゃないっ!!メールしても返信来ないし!」

「う、ごめん……………」

やばっ…必死で、全然携帯が鳴ったのに気付かなかった…

「私、この合宿に薰がいなかったらどうしようって泣きそうだったんだから!薰がない合宿なんて合宿じゃないっ!!」

理子が喚きながら抱きついてくる腕に力をこめる。

く、苦しい…………。

っていつか私汗だくなのに気持ち悪くないのかな?

「おいおい、なーに2人でイチャついてんだよ。…………時間が押ししてるんだけど?」

榎本先生が苦笑混じりにそう言うてから、はあっとため息を付く。

「す、すみません……………」

「…………たく。お前らは部長だって自覚は少しはあるのか?揃いも揃って遅刻するとはなかなかいい度胸じゃねえか」

え……………？

「お前らって……………」

「なあ、昂？」

先生はそのまま私の背に向けてニヤリと笑った。

えっ……………！？

いきなり後ろから荒い息遣いが聞こえてきた。

「はあっ……………悪い、遅れたっ……………」

後ろをおそるおそる振り返ると、視界には息を切らして屈み込んでいる昂の姿。

な、なんで昂も遅刻してるの！？

驚きを隠せずにはちぱちと瞬きを繰り返していると、顔をゆっくりと上げた昂とばっちり目があった。

一瞬見せた昂の真摯な眼差しにたじろぐ。

だけど昂はそれ以上何もいう事はなく、いつものような笑顔を浮かべた。

「悪いわるい、なんか緊張しすぎてイマイチ寝れなくってさー」

「アンタねえ、少しも悪いと思ってるようには見えないけど…？」

「しょうがねーじゃん。まあ、それほど今日という日を楽しみにしてたってことで」

あ、れ……………？

普段と変わらない、女の子たちを一瞬で魅了してしまうような明るい笑顔を浮かべて昂はいつものように軽口をたたいている。

気に、されてない……………？

そのまま昂は暁君と楽しそうに話しながらバスに乗り込んでいってしまった。

「ふう……………昨日はどうなることかと思っただけど気にする必要はなかったみたいだね。すっかり機嫌もなおったみたいだし」

理子が隣で呆れ半分で呟く。

昨日、一悶着あったようにはとてもじゃないけど見えなかった。

私、昨日確かに昂に告白したよね……………？

昂にとつたら気にするまでもない、どうしてもよかつたってことなの……………？

所詮、…おさななじみ…の告白だから？

突然、いたたまれない様なひどく悲しい気持ちになった。

つまり、数年越しの想いも昂からみれば何の価値もなかったということだ。

あれだけ昨日泣いたというのに、また俄かに泣きたくなくなった。

はは…

昨日「気にしないで」って言ったのは私の方なのに…

ふと矛盾に気付いて、思わず苦笑する。

バスは女子と男子で別々で、二台で行くことになっている。
バスに理子に続いて乗ると、

「薰っ！おはよーっ！！」

「きゃあっ、おはようございます、薰先輩っ！」

「今日はめちゃくちゃ合宿日和だね あー海が楽しみだわ」

「部長が遅刻なんて珍しいなあ。ほらっ、はやくはやく！薰の席はここだよ！」

と友達やら後輩やら様々なところから元気よく声をかけられた。

皆初めての合宿で興奮しきっているようだ。

というか、むしろ海を楽しみにしている人が多数なんだろうけどさ。

ん……………？

皆に遅れたことを謝っているとふと強い視線をバスの後部座席のほうから感じて、そちらに目をやってみると……

「あ……………」

吃驚して小さく声を漏らしてしまった。

櫻坂、さん……………

櫻坂さんは綺麗な顔でじつと私のことを睨みつけている。
その表情はあきらかに苛立っていた。

理子がこっそり耳打ちをしてくる。

「この合宿中、うちらずーっとウザザカと一緒になんだってさ！バスだけじゃなくて旅館の部屋も！そりゃあそうなんだろっけど、ああ~~~~っ！！耐えられそうにないよっ！！ストレスで禿げるかもしんないっ！」

「はは……………」

ただでさえ憂鬱な気分で合宿にやってきたというのに、よりによって櫻坂さんと一緒……………

これから前途多難な茨の道が待ち受けているだろっことが確定したようなものだ。

今日から二泊三日……………

私、生きて帰れるのかな……………？

初日から気分はとんでもなく重いものとなってしまった。

「着いたあ　　つつ!!」

バスから降りた瞬間、万歳のポーズをとって次々と皆叫んでいく。隣のバスから降りてきた男子たちなんて、童心にかえった少年のようになぜか追いかけてここまで始めていた。

バスに揺られて3時間ちよつと。

目の前には光が反射してきらきらと輝いている、薄いブルー色の綺麗な海と白い砂浜が広がっていた。

「うひゃーすごいなあ。これはもう泳ぐしかないね!」

「浮き輪持ってくればよかったあ!!」

皆もう海しか目に入らないみたいだ。

練習の事なんて完全に頭から抜け落ちているにちがいない。

まあ、気持ちは分らないでもないけど…

「よーしっ、誰が一番先にこっから海にたどり着けるか勝負しようぜ!」

「いいぜ、その勝負乗った!!」

男の子たちがいきなりくだらない勝負を始めようとしていた。なぜか皆ムキになって「負けねーからなあ!」と意気込んでいる。

ちよ、ちよつと!?

はっ、てか女の子たちもいつのまにか砂浜にいるし!!

隣で理子は「いやあ、青春だなあ」としみじみ和んでいる。

り、理子さん……………

「ちよつと皆~~~~っ!!」

叫んでみるが、まったく聞こえる気配無し。

皆好き勝手に行動を始めてしまい収集がつかない事態に呆然として
いると、先生と話が終わったらしい昴と暁君がバスからやっ
と降りてきた。

「おい、旅館にまず行くから全員荷物もって　　って、はっ!?

お前らなにやってんの!？」

「おい、昴も暁も勝負しようぜー勝負!」

「お前らなあ……………」

「おい、全員よく聞けっ!!!!」

いきなり樫本先生が大声で叫んだ。
皆なにごとかと振り返る。

「今から1分以内に荷物を運べ!!じゃなきゃ1人でも間に合わ
ないや全員昼飯抜きだからなあ　　!!!!」

『ええ~~~~っ!!!!?』

皆慌てて戻ってきて、荷物をせっせとバスから下ろし始める。

うん……………さすが先生……………

「かつしー!!旅館ってどれのこと?」

「あ？あれだよ、あれ。割と大きいやつ」

先生はここから少し離れたところにある静かな佇まいをみせる建物を指した。

「明るい雰囲気でありながら風格のある純和風の立派な旅館に「おおーっ」と感嘆の音が口々に沸き上がる。

「すつげえーかつしー！よくあんなトコ見つけたな」

「かつしーってば素敵！！サイコーッ！！」

「はいはい〜お褒めの言葉に預かり光栄ですよ、おぼっちゃま方。いいからさっさと荷物運べって」

『はい！』

旅館に入って出迎えてくれたのは、優しそうな老夫婦だった。

女将さんは嬉しそうに顔をくしゃっとして微笑むと、

「ようこそ”躑躅^{ツツジソウ}荘”へいらして下さいました。何もないところですがゆっくりしていつて下さいね」

と丁寧にお辞儀をしてから、先生の方に向き直った。

先生も姿勢を正して頭を下げる。

「お久しぶりです、桂のじいさん、ばあさん。今日から3日間お世話になります」

「おおー、勇君じゃないかあ。でっかくなりおって！元気にしておつたかあ？」

「ふふっ、勇君つたらしばらく見ない間にさらに男前になっちゃったわねえ」

先生はがしがしと頭を撫でられて「ちよっ、生徒の前ですから勘弁

して下さい」と慌てていた。滅多に見れない先生が恥ずかしくなる姿に一同大爆笑が起きる。

すると奥の方から、

「やあ、勇！元気だった？」

といきなり人影があらわれた。細い眼鏡をかけている顔が整った紳士っぽい男性。隣はちょこんと小さめの可愛らしい女性が立っている。

「拓弥タクヤ！？なんでお前がここにいるんだ!?!」

「なんでって……相変わらずつれない奴だなあ君は。君がここに来るって言うから、わざわざ帰省する日程をずらしたんだよ。皆さん、初めまして。勇の友人の桂拓弥です。隣は僕の妻の悠子ユウコ」

「初めまして」

2人が頭を下げてきたのにつられて、皆ばらばらに頭を慌てて下げ返した。

「そんな所に立っていらっしやらないで、どうぞお上がり下さいな。二階は本日貸しきりになっていますからよろしければ温泉もご自由にお入り下さいね」

『温泉!?!』

『きゃあっ、やったあ〜!!!』

「あ〜もう！お前らいいから早く二階に上がれっ！あとでこれからの予定伝えるから」

「はい」と元気に返事をして騒ぎながらバタバタと皆二階に上がっていく。

理子も「温泉温泉」と嬉しそうに鼻歌を歌っていた。

私はそんな様子に苦笑しながら荷物を抱えると、二階へと上がることにした。

背後で櫻本先生の盛大にため息をつく音が聞こえた。

女子の部屋は全部で4部屋あった。

なんとか櫻坂さんと一緒の部屋になることを免れることができ、ほつとして一息つく。

まあ、これは理子が裏で計らったらしいんだけど…

昼食を食べ終え、午後は新設の体育館で4時間ほど練習をすることとなった。

予想以上に体育館の設備が整っていたことに喜びを隠せずにながらも、やはり練習はめっちゃくちゃハードだった。あちこちで榎本先生の罵声が飛び、思う存分にしごかれ、6時頃に練習が終わったときには皆へとへとになっていた。

「うわあーっ、ホントに疲れたよお」

「ありえないよ、かつしーったら！あんなメニューこなせる筈ないじゃんっ」

「あー、ダメだ死にそう……みんな…私のことは気にせず先に行つて……」

「ひろみい　っ！！死ぬな！！あんな鬼畜なやつに負けちゃダメよ！！」

先生への文句が飛び交う中、さすがにそれに参戦する気にはなれなかった。

勿論ぐったりしてて言葉を発するのでさえ億劫だったのもある。

ただあのキツイ練習のおかげで思った以上に体を動かすことができ、一種の解放感のようなものに包まれたのも確かだったのだ。

「あーあ。薰ってば1人でそんな嬉しそうな顔しちゃって」

理子が旅館に向かう途中、どこか面白そうに声をかけてきた。

「え!？」

うそ…もしかして顔に出た?
慌てて自分の顔を両手でおさえる。

「表情に出てるよん バスケが大好きだーってね。薰って体力も他の皆と違ってケタ外れにあるしシュートも入るし統率力もあるし、あーっ、やっぱり薰ってホント素敵だわ!」

「……………違うよ」

断じてそんなことはない。

むしろすごいのは理子のほうだ。

今日の練習だってそうだった。

私は自分のことだけで手一杯で余裕すらなかったというのに、理子は自分だってキツイにもかかわらずチームメイトに励ましの声を何度もかけていてあげた事を知ってる。

特に一年生なんてまだ入りたてで、今日の慣れないハードな練習についていくのに音を上げそうになっていた。そんな後輩たちを立ち直らせたのはほかでもない理子のおかげなのだ。

「……………理子にはホントに感謝してもきれないぐらい感謝してる。いつも頼りない私を支えてくれてありがとう。私、理子のこと大好きだよ」

嘘のない正直な言葉だった。

昂のことでもそうだ。いち早く私の変化に気付き、さりげなく何度も理子は落ち込んでる私を励ましてくれた。

理子に伝えてしまった後で、急に恥ずかしさが押し寄せてくる。

えっと……

もしやとんでもなく恥ずかしい台詞を言ってしまった？

理子から何の反応も返ってこないことに気付き、焦っておそるおそる彼女を見ると……なぜか理子は茹でだこのように顔を真っ赤にしていた。

ぎよっとして目を見張る。

「り、りこ！？だ、大丈夫！？」

そんな声も彼女にはまったく届いていないようだ。

理子は顔を俯けて、ぶつぶつと何かを呟いているようだがよく聞こえなかった。

「相手は女、相手は女だ……落ち着け私。鼓動よおさまれえ……」
「え？」

「かおるーっ！理子ーっ！汗かいたし早速温泉にいかないー！？」

いつのまにか旅館の前にたどり着いていたらしい。

聞き返す前に理子との会話が中断されてしまったが、結局、満場一致で温泉へいくことになったのだった。

「うーん、極楽極楽」

「はーっ気持ちいいねえー……なんか眠くなってきたそうだよ……」
「しかも露天風呂まであるなんてねえーああ癒されるわあ」

体を流し終え、タオルを体に巻き付けて湯にゆっくりと浸かった。
今、みんなが入ってるのは広い海が一望できる露天風呂。

絶景に目を奪われながらも、みんな気持ちが良さそうに目をとろんとさせている。

「いやあ〜にしても男子つてば可哀想だね〜」

「ホントホント！何時までやる気なんだろっ……薫はいつまでか知ってる？」

私は小さく首を振った。

私たち女子バスのほうは、あんまり無理させることもどうかと思っただけ早めに切り上げさせてくれたのだ。

「分かんないけど……先生が満足のいくまでじゃないかな」

男バスの方は今でも先生による猛特訓が行われているはずだ。

体育館を出る間にちらりと男バスの様子を見たら、あの昂でさえすごい辛そうだった。まあ、櫻坂さんにまたぎろりと牽制するよう
に睨みつけられたから見れたのはほんの一瞬でしかなかったけど……

「そっかあー……でもあの楠原君と一緒に合宿とかちょっとドキドキしちゃわない？」

「あつ、それ分かる！彼の知られざる一面を見ちゃったりとか？き
やつ」

突然、昂の話題になって思わずびっくりとする。

何気ない振りを装ってはいるけど、やっぱり他の人が昂のことを話
すのを聞くのは胸が痛んだ。

「あつ、ねえ。その事なんだけどさ……私今日見ちゃったんだよね
「えっ！？見ちゃったって、なにを！？」

さっきまでのとろんとさせた目はどこに行ってしまったのか。
寄りかかっていた体をぱつと起こし目をぎらぎらとさせて、皆聞き
耳をたてる。

「お昼ご飯のあとにねトイレに行こうと思ったら、なんと廊下で楠
原君とウザザカが抱き合ってたの！！わたしびっくりしてそこから
逃げ出しちゃった」

『ええ〜〜っ！！？』

仰天したような皆の叫び声が響きわたった。

「それって密会！？」

「ウザザカのやつ本当に嫌いだあ〜！！アイツちよつと美人だか
らってそれを鼻に掛けてるしさ！」

ぼんやりと交わされる言葉を聞きながら、心のどこかでは
ああ、やっぱりそうか……と悲しいぐらいに腑に落ちてしまった。

現実をいっきに目の前に突きつけられた気がする。

昂と櫻坂さんはラブラブで、私はそれを妨げようとした単なる邪魔者でしかないのだということ。

櫻坂さんはおそらく私が告白したことを昂から聞かされていたに違いない。

だから今朝から櫻坂さんは私を睨んでいたんだろう。

櫻坂さんに余計な心配をかけさせちゃったな……………

急に体に巻いていたタオルをつんつんと小さく引っ張られて視線を右に動かすと、

「薫、のぼせそうだからもう一緒に出ない？」

と理子が目に心配そうな色を浮かべて言った。

ああ、また気を遣わせちゃったか…………

理子にこんなに心配をかけてるのに言わないわけにはいかない…………

浴室を出て脱衣所で簡単なTシャツとハーフパンツに着替え終えてから、理子に昨日のことを全て話すことにした。

理子は私が努めて昂にバレないようにしていたのを知っていたからか、驚きが隠せないようだった。

「薫、あんまり気にしちゃダメだよ。明日海にも行けるし全部忘れ

てパーツと遊ぼう！パーツとさ！！」

「うん……………ありがとう」

ぎこちない笑みを浮かべて答える。

理子のこれ以上ない優しさがじんわりと身に沁みて、涙が零れ落ちそうになるのをぐっと堪えた。

合宿2日目

榎本先生は私たちが海を楽しみにしていたことを知ってか知らずか、早めに練習を切り上げて海に行くことを許可してくれた。

もちろん大騒ぎになったのはいうまでもない。

男の子たちは一体どこにそんなものを隠し持っていたのやら浮き輪やボールを荷物から取り出し、一方女の子たちとはというとお肌のお手入れとかいって各部屋で丹念に日焼け止めクリームを塗り始めている。

そして私は、今まさに熱い視線が背後から自分に注がれている結構ピンチな状況に立たされていたりした。

「ふっふっふっ。どんなにこの時を私が待ちわびていたことか……」

不気味な、まるで魔女のような台詞にぶるっと全身に寒気が走る。

目に獣のような怪しい光を宿してじりじりと詰め寄ってくる理子が手にしているのは例の水着。
妙な気迫に思わず後ろに後ずさる。

「り、理子？ やっぱりそれはちょっと無理かなーなんて……」

この水着を着た自分の姿を部員全員の前に晒すのは恥ずかしい、というかとてもじゃないけど耐えられそうにない。

さりげなく抵抗してみるが、理子はさつきから全く同じ笑みを浮かべたままで何も答えようとはせず、更に一步、二歩と私との間合いを詰めていく。

こ、こわい…！怖すぎるって…！！！！

同室の子達はそんな様子を見て「あははー2人とも何楽しそうなのとやってるのー？早くしないと先行っちゃうよお？」とまるで他人事のように（いや、他人事だが）楽しそうに笑っている。

だからこれのどこが楽しそうに見えるんだっ！！！！？

今まさに「猛獣に迫られてる可哀想な羊」という構造は目に見てはつきりとれるよね？ねえ？

私が救いを求めようとする前に理子は「いいよ、先に行つて。海はすぐそこだし後から薫と2人で行くからつて楠原達に伝えておいてくれる？」と鬼のごとくあっさり逃げ道を遮断し、嬉しそうに出掛けていく女の子達を泣く泣く見送る事になってしまった。

部屋にどこか楽しそうに微笑んでいる理子と部屋に2人つきりで取り残される。

「薫？往生際が悪いわよ？」

「りこ〜〜〜っ」

「そんな仔犬のような目をしたってダ〜メッ！！今日あのスパルタ倍増練習に耐えられたのも薫がこの水着を着てくれる楽しみがあったからなんだから！！！！」

は、はあっ！！！！？

なに、そのオヤジっぽい発言は！！

「いいから早くっ！せっかく海に行けるのに薰が着てくれなきゃいくらたつても行けないじゃない！！」

「嫌だ！お願い！勘弁してっ！Tシャツのままでもういいからっ」

「……薰？いつまでも我が儘言ってるって強行突破で無理やり服脱がせるわよ？」

「~~~~っっ」

「ほら、薰？」

凶悪な笑顔で微笑まれ、もはや抵抗する術は何も残されていなかった。

海は夏休みに入ったからか大勢の海水浴客で溢れかえっていた。

特に家族連れやカップルが多いようだ。

青い空、青い海、眩しく輝く太陽……

ただど今は全部かなり恨めしいゾ（混乱のためキャラが崩壊しています。ご注意ください）

「~~~~」

砂浜でシートを引いていた女の子達がぽかんとした顔で私に視線を向けている。

……っ！！

だから嫌だつて言ったのに……！！！！

理子にパーカーまで剥ぎ取られ隠すものは何もなくなつてしまい、このありえないぐらい露出度高めの水着を柄でもなく着てきた私に驚いている事は嫌でも分かる。

だつて私でさえ現在進行形で自分に驚いているぐらいなんだからっ

……！！

こんな私に比べて皆それぞれ自分に似合つた可愛い今時の水着着てるし……

「あれえ〜？男子達は？ウザザカもないし」

そんな事を隣で暢気に聞く理子を本気で憎みたくなる。

「……え、え？あ、えーつとウザザカ含め男子達は海の家で食料と飲み物を調達しに行つたけど………つていうか薫のその格好………」

もう何も聞かず見なかつた振りをしてほしい……

「ふふつ 私の最高傑作なの　すごいでしょ？？」

性懲りもなく自慢げに理子がそう言つと、辺りにまたしんとした空気が訪れる。

なに？これ苛め？苛めなの？

昂にも失恋し、唯一の楽しみである海でさえこの始末？

神様、とうとう私を放棄しましたね？

もうここでいつその事失神して神に召されてもいいかなあ……とぼんやり遠い目で空を仰いでいると、いきなり

「!?!?」

「きゃあああああ!?!?!先輩、かつこいいいい!?!?!」
「薰っ!?!?昨日お風呂入つてるとき全然気付かなかったわ!?!?ア
ンタそんなにスタイル良かったわけ!?!?!?」

「足長っっ!?!?デルモじゃんっ!?!?っーかデルモやるべきだよ!?!?」
「いえっ!?!?グラビアじゃないですか!?!?先輩一体何カップある
んですか!?!?羨ましすぎですっう」

と覆いかぶさるようにして次々に抱きつかれた。

はっ!?!?!?な、なにごと!?!?

驚いてされるがままになっていると、戻ってきたらしい男子達の騒
がしい声が聞こえてきた。

「おーい、トウモロコシとか焼きそばとかジュース買ってきたぞー
!?!?」

「ちよつと買いすぎたか?まあ、すぐ食べちゃっからいつか」
「っーかお前ら何やって…!?!?」

私の姿を見た途端、男子達も面白いくらいに喋るのをやめて固まっ
ていく。

男子にこんな姿を見られるなんて女子とは比にならないくらい恥ず
かしすぎる!?!?!

そっういえばすっかり忘れてたけど、この姿昂にも見られることにな
るんだよね!?!?

それだけは嫌だっ…!?!!

てか絶対キモイって思われるし!?!!

だって昂は私と泳ぎに行ったときとか昔からスクール水着しか見えないんだよ…!?

昂に今軽蔑の眼差しで見られたらホントに耐えられない…
昂が来る前にそれだけは断固阻止しなきゃっ…!!

私は集まる視線を無視して、慌ててきよろきよろと辺りを見回すと広げられているシートの端に運良く荷物に混ざってパーカーが置いてあるのを発見した。

今だけこの視力の良さに感謝しますっ！神様っっ！！！！

誰のかわかんないけど取り敢えず借ります！！

私は抱きつかれて撫で回されていた手を何とかして剥がすと、(かなり無様な格好だったと思うが)這い蹲ってシートの端まで向かった。

そして急いで黒のパーカーに手を伸ばし着ようとしたその時

「おい、それ俺の …っ!?!」

と目の前から突然聞こえてきた声に思わずびくっと体が反応する。

こ、この声は、まさか……

おそろおそろ視線を上に向けると……

(…っ、最悪だ ……!!)

そこにいたのは呆然としてジュースの缶を両手に抱えて佇む昂と暁君の姿だった。

一瞬、空気が止まったような感覚に襲われた。

「あ……………」

何か喋ろうと思っても、うまく言葉が続かない。

昂は黙ったまま視線を私の水着に向けていたが、そのまま顔をすぐに横に逸らした。

ズキン……………

言い様のない痛みが胸を襲う。

遅かった……………

昂の事だ。きつと「似合わない」とでも思っているんだろう。

今すぐこの場を立ち去りたいのに、足が竦んで動けない。

こんな姿を晒す気はこれっぽっちもなかったのに……………

気まずさで昂を見れずに顔を俯ける。

羞恥心のあまり、体が震えた。

いま、昂は何を考えてるの？

みっともない、ってやっぱり思ってる？

実際は数秒のことなのだろう。

ただどこの沈黙の間はとんでもなく長いものに思われた。

すると、いきなり頭上から何かが覆いかぶさってきた。視界がいきなり真っ暗になったことに驚き、慌てて「それ」を頭上から下ろす。

え……………？

手にあるのはさっきの昂の黒いパーカーだった。

何が何だか分からず昂の顔を見上げると、昂は目線を逸らしたまま、

「着てるよ、それ」

とぶっきらぼうに言い放った。

「え……………？」

聞き間違いかと思った。

びっくりして瞬きを何度か繰り返す。

昂の表情は横を向いていたから読みとることは出来ないが、どこか不機嫌そうなオーラを漂わせている。

呆然としてパーカーを見つめていたが、すぐに独り合点した。

昂はこのパーカーを貸してくれるのだ。

気を遣ってくれたのだろう。

昂は優しい。昔からそうだった。怪我をしたときも、他の男子と喧嘩したときも一番に駆けつけて慰めてくれたのはいつも昂だったように思う。

その優しさは今でも変わらない。

たとえそれ以上見苦しい姿を晒すな、という意味で貸してくれたの

だとしても。

「ただど……今の自分にしてみればその優しさは残酷なものでしかないのだ。
ぎゅっと胸が締め付けられ、途端に熱いものが胸の奥から込み上げてきた。」

「まずい……！」

急いで笑顔を装うと立ち上がって、そのまま昂の胸にパーカーを押しつけた。

「このままで大丈夫。わざわざ貸してくれたのにごめん。ちょっとトイレ行ってくる」

「は？お、おいっ！」

昂の呼び止める声を無視して、人混みの中へと入っていく。

ぶつちやけトイレがどこにあるかなんて全く分からない。

「ただこの場にはもういたくなかった。」

「どこでもいいから一刻も早く逃げてしまいたかった。」

「同情なんかで優しくされても辛いだけ。」

「たとえその気がなくても中途半端に優しくされるぐらいなら、思いっきり突き飛ばされた方が断然マシだ。」

「自分がどこへ向かっているのかも分からぬまま、ただひたすら足を進めていく。」

途中で櫻坂さんとすれ違った。

目が合った瞬間、鋭く睨まれる。

そして可愛いらしい顔にはふさわしくない挑戦的な微笑みを浮かべてから、軽快な足取りで彼女は皆のもとへと戻っていった。

振り向くことは出来なかった。

昂と櫻坂さんの仲睦まじい姿を今だけは……………今だけは見たくなかった。

もう泣いたりしない、と心に誓ったから。

ここは一体どこだ……………？

知らぬ間に随分遠くまで来てしまったみたいだった。

辺りをきよろきよろと見回すがどこを見ても人、人、人のオンパレード。

あまりにも人が多すぎて現在地すらよく分からない。

こ、困った……………

もともとトイレに行く気はなかったけど、これではトイレどころか皆のもとに帰ることすら危うい。

何を隠そう、実は結構な方向音痴だったりする。

自慢じゃないが、自分の学校の校舎内ですらたまに迷子になるくらいなのだ。

後先考えずにこんなところまで来てしまったのは間違っていたのかもしれない。

それに……………
気のせいかもしれないが、さっきからやたらと行き違う人に見られている気がする。

単に自意識過剰なだけかもしれないが…

この格好がやはり目立つのかもしいない。
人目にもきつと変に映るのだろう。

なんだか急に居心地が悪くなった。
さっさと戻ろう……………

人混みの間からは海の家が何件かちらちらと見えた。

しょうがない……………海の家の人に尋ねるしかないか。
せめて旅館……………えっと躑躅荘だったっけ？その場所だけでも確定できればあとは自力でなんとかなるだろう。

このまま戻らない自分を心配して迷子放送なんてかけられたら、たまったもんじゃないし……………
うわっ……………それだけは勘弁してほしいかも。
恥ずかしすぎるにも程がある。

「ねえねえ、きみさあー」

「……………」

「ちよつと？君に話しかけてただけどー」

「……………え？」

肩を後ろから掴まれて振り返ると、そこにはニヤニヤと笑っている男2人組。

金に近い茶髪に焼けた小麦色の肌。形容するならまさに「チャラ男」
って感じ。大学生ぐらいの年齢に見えるけど……

「あの……なにか？」

「君さあ、大学生？超美人だね！っ！かスタイル良すぎだし」

「ホントホント。もしかしなくてもモデルとかやってんのー？」

「は？」

やってるわけがない。意味不明だから。

というか一体何の用があつて話しかけてきたんだ？

訝しげに眉間にしわを寄せてチャラ男達を見ると、なぜか彼らは二
ヤついたまま視線を下に ……

「……っ!？」

ぞわつと寒気がした。

明らかに目線の先は胸に向けられている。

ヤバイ……何だか嫌な予感がする。

「ねえ、これから暇？俺ら超穴場知つてんだよね。良かったら一緒
行かない？」

「いえ……いいです。あの、急いでるんで失礼します」

早くこの場を離れなくては。

男達の返事も待たずに歩き始めようとする……

が、両腕をがっちり掴まれ行く手をふさがれてしまった。

「ちよっ……!」

「ちよつとぐらい時間あんだろお ？ケチケチすんなよなあ。おい、

連れてこーぜ」

片方の男がもう1人の男に目配せする。
そして腕を掴んだまま、人影の少なそうな方向に歩き始めた。

ち、ちよつとちよつと!!!?

ま、待って、これってかなりピンチ!?

腕をほどこうとしても男と女の力の差では所詮たちうち出来るわけがなかった。しかも相手は2人。

「ちよつと!やめっ……………誰かつ」

叫んで誰かに助けを求めようとした瞬間だった。

突然後ろからもの凄い力で体を引っ張られた。あまりの勢いにバランスが崩れ転びそうになったところを、後ろからしっかりと抱きかえられる。

「お兄さん達、俺のに手を出すのやめてくれない?」

聞き慣れた声が耳元で響いた。

この声……………っ

「……………昂っ!?!」

な、なんでこんなところに!?

「薰、大丈夫か?」

心配そうに顔を覗き込まれる。

バカ……こんな反則だよ……

ヤバイ。昂の顔を見てほっとしたのか泣きそうになってしまった。
今更、恐怖で体が震えてくる。

こんなのに怯えるなんてキャラじゃないのに……それに気付かれ
なくて何度も首を縦に振って「大丈夫」と平気な振りを装った。
だけどその瞬間、

「……っ!？」

いきなり力強く抱きすくめられた。

「……バーカ。無理して強がる必要なんかないだろ」

昂が耳元でそっと囁く。ササヤ

そのままぎゅっと昂の少し汗ばんだ胸に顔を押しつけられた。
香水のものだと思われる爽やかな匂いが鼻を掠める。

ドクドクドク……

今にも心臓が飛び出してしまいそうなくらい鼓動が高鳴っていた。
密着した体から昂にも伝わってしまったっているだろう。

な、な、なな………!？」

恐怖心なんてとっくにどこかに吹っ飛んでいってしまった。
何でこんな状況になってしまったのか分からず頭が真っ白になる。

な、なんでこんなことに!?

脳を正常に働かせることが出来ず、昂に抱きしめられたまま体は石像のように硬直してしまった。

昂はぽかんと突っ立っていた男たちに向き直ると、これ以上ないぐらいの笑顔を浮かべて言った。

「悪いけど、お兄さんたち他の女当たってくれる? コイツ俺のだし……今度手出したりしたら殺すから」

(……………っ!?)

思わずぐくと息を呑んだ。

普段の昂では想像がつかないほどの冷たい目。殺気まで感じられるのは気のせいだろうか?

そして同時に昂の台詞にひどく動揺してしまった自分がいた。

この場を凌ぐためのものである事は嫌でも分かっていたはずなのに

……

心のどこかで嬉しく思うのを避けられなかった。

男たちは昂の気迫に怯んだのか、何も言わずにあつと言つ間に退散していつてしまった。

仮にも相手は年下だというのに、少し情けなさすぎる気もするが……

男たちが消えても、昂の腕に閉じ込められたままだった。

きっと今自分の顔はのぼせたように赤くなっているに違いない。

考えてみれば、こうやって2人きりになるのはあの告白以来なのだ

……
何だか急に気まずくなくなってきて、慌てて身動きをとろうとした。

「あ、の……ごめん。もう大丈夫だから……離して？」
「……………」

昂は黙ったままそっと腕をはなした。

昂から離れてもなお心臓は煩く鳴っている。

そういえば……

昂はなんでこの場所にいたんだろう？さっきの所からはかなり遠いはずなのに……

「昂？なんでこんな所にいるの？」

「……………だろ」

「え？なに？」

「……………何でもない。ほら、行くぞ」

昂は私の返事を待たずに手をとって歩き始める。

その横顔はどこか苛々としているように見えた。

な、なんで……………？

聞き返す暇もなく強引に引っ張られる。

わけが分からないまま引きずられる様にして慌てて足を動かした。

本人は自覚しているのだろうか？

老若男女問わず、みんな自分を見ているという事実を。

さつきから何度もすれ違い様に女の子達が騒いでいることを。

確かに昂の容姿は目立つ。

まあ、そりゃそうだろう。なんたって学園のアイドルなわけだし……

切れ長の大きな目に筋がすっと通った高い鼻とバランスの良い甘めの端正な顔立ち。

バスケで鍛え抜かれた無駄のない筋肉と高い身長。

柔らかかそうな栗色の髪は、海にでも入ったのだろうか？

少し濡れていてはつきり言って男の癖に妙に色っぽい。

文句の付け所のない完璧な容姿。

人目を惹きつけるのは当たり前だろう。

騒がれてもまったく動じる様子を見せない昂は、こんな状況にはとつくに慣れてしまったのかもしれない。

モテ慣れ……とでも言うのだろうか？

事実学校でも下駄箱には毎日5、6通のラブレター、とお約束なことが昂の身に起きているわけだし……しかも学校だと昂の明るく優しい性格までもが筒抜けなワケだから、噂によると振られてもその優しさのせいで諦めきれない子が多いらしい。

ホントに罪作りな奴だ。

……なんて考えてる場合じゃなかった。

何度も言うようだが、目立つことは極力避けたい。

もともと目立つのは苦手だし、道端にひっそりと生えている雑草のような感じでいられれば十分満足なのだ。

なのにこの男… 昂と手を繋いでるせいで必然的に自分にも視線が集まってくるという、ありえない状況の中に今現在立たされていたする。

今すぐこの手を振り払って脱走するという手も考えたが、そんな事をすればかなり高めの確率で迷子になるだろう。いや、むしろ間違いない。

そういえば…… 子供の頃からよく迷子になってたからか、いつしからか昂はこうやってよく手を繋いで前を歩いていてくれた気がする。なんかちよつと懐かしいかも…

と、回想しかけて慌てて首をぶんぶんと振った。

ま、まずい。

なんかもう、現実逃避？しかけてる……

だけど何か考えていないと緊張でまた頭の中がぐちゃぐちゃになってしまいそうで怖い。

ただでさえ今だって心臓が異常なほどドキドキしているのに……

昂に気付かれないように小さく溜息をこぼしてから、ふと異変に気が付いた。

あれ…？

「じ、昂？じつちって…」

お、おかしい、明らかに……

普通皆のもとに戻るなら海沿いに歩いていくべきなのに、なぜか海とは真逆に進んでいるのだ。

このまま行けば確実に旅館に行き当たる方向。いくら自分が方向音痴でもこれぐらいは分かる。

「いいんだ、こっちで」

足を止めずに昂はあっさりと言い切る。

「え？だってこっちじゃ全く逆だよ？海から離れてってるし」
「薰」

呼ばれて目線を上げると、昂はいきなり立ち止まってこちらを見た。

どくん……

心臓がビクツと一瞬止まる。

昂は見た事がないほどの真剣な表情を浮かべていた。

…なぜか予感がした。

昂がこれから言おうとしている事も、何が起きるかも……間違いない、どこか確信に近いものが。

…マダ、キキタクナイ。

「話があるんだ。だけどここじゃ話せない」
「薰　　つつー……！」

昂の言葉に覆いかぶさるようにして、人込みから突然大声が響いた。姿を現したのは、ぜえぜえと息を切らした理子と暁君。

「理子！」

「もっつ、どこ行ってたの！？帰ってくるのが遅いからトイレに行ってみれば薫はいないし、楠原もいつのまにか姿を消してるはでめちやめちや慌てたんだからねっつ！！」

「ご、ごめん。」

「とりあえず説教はあとっ！いまちよつと大変なことになってるの！2人とも早く来てっ！！」

理子がまた人込みの中へと走り出していく。

「え？ちよつと理子っ！？」

「いいから、早くーっ！」

どういう事？

「ああ、ちよつと收拾の付かない事態になって困ってるんだ。俺らじゃちよつと……」

暁君もすっかり困り果てた顔で理子に同意するように頷くと走って行ってしまっつ。

あつという間の事である場に2人でぼつんと残された。

い、一体何が……？

昂は頭をがしがしと搔いてから「ったく、しょうがねえな」と隣で諦めたように溜め息をつくつと、こちらに向き直った。

「薫。今日の夜、体育館に來い。話があるから」

それだけ言い残すと、昂も2人を追いかけるようにして走って行ってしまった。

その背中をぼんやりと見つめながら溜まっていた息を吐き出す。

……予想はついていた。

さっきだって、いつかはこうなる事が分かっていたはずなのに……なのに今すぐその場から逃げ出したい衝動に駆られてしまった。

時間を先延ばしにしたところで無駄な事は分かっている。

でもどうしてもまだ聞きたくなかったのだ……昂からのはっきりとした言葉を。

だけど、今夜昂に振られる。もう逃げ道はない。

その覚悟を決めなくては。

「……………は？」

「……………馬鹿じゃねーの？お前ら。ガキじゃねーんだからさ……………」

現状を目にした途端、私と昂の口から同時に発せられた言葉。

怒鳴らなかつただけ誉めてほしい。

呆れて物が言えない、つてまさにこの事なんだと思う。いや、実際には喋っちゃってますけどね。

これで呆れないって人がいたら逆にお目にかかりたい。

ただ事じゃないな、とは思っていた。

だって理子は別としても、あの冷静沈着そうな暁君が滅多に見せない焦った表情で取り乱してたんだから。

現場に駆けつけたときだって（なんか刑事物語みたいになってきたけど）周りを取り囲んでいた後輩たちはおろおろと突っ立ってるし、騒ぎの中心からは激しく言い争う声が聞こえてくるし。しまいには海水浴に来ていた一般のお客さんまでわさわさと集まってきてしまい、まさに大混乱だった。

これで、ただ事じゃないと思わない方がどうかしてる。

しかも騒ぎの中心にいるのはうちの部員。周りにいる人が邪魔で何が起きてるかまでは分からないけど、これで何か問題を起こしたり事件に巻き込まれたりしたらそれこそマズい。

合宿どころか下手したら部活動停止すらありえるわけで

……………

慌てて昂と2人で人込みを掻き分け始める。

後にも先にもないっていうぐらいの必死さ。

そりゃそうだ。練習の合間にやってきた海で起こした問題のせいでバスケが出来なくなったりしたら間違いないくストレスで死んでしまふ。バスケがない高校生活なんて有り得ない……そう思ったのは私だけではなかったようだ。

何としてでも一刻も早く騒ぎをくい止めなきゃ……！！

だから。

繰り返らられていた光景を目にしたときは本気で我が目を疑った。意気込みが強かっただけに……その衝撃の威力はハンパなかった。

……は？

「2人とも……なにしてんの？」

2人……いや、正確には4人、か？

争いの中心にいたのは同年代の女子バス2人と男バス2人の計4人。女子バスの方は咲と千鶴子で、男バスの方は……染谷君と藤堂君？

一見すると2・2で対決するような形で向き合っているように見えるが、よくよく見れば咲と染谷君がメインでそれぞれ援護に千鶴子と藤堂君がついてるって感じ。

別に取っ組み合いの喧嘩になっているわけでも、どこかのチンピラと不祥事を起こしていたわけでもない。

だが4人の張り上げる声があまりにも大きすぎて人目が集まってしまったようだった。

はああああ~~~~~……ホントに何やってるわけ？

私たちの存在に気が付いた途端、4人ともピタツと争つのを止める。咲が真つ先に私に向かって「かおるう〜!!」と泣きながら胸に飛び込んできた。

「ひどいのお、ひどいのお！染谷ったらありえないっ!!」

「咲……………、何があったの？」

目を真つ赤にして首を振りながら泣き叫ぶ咲。

一体何があったというのか……………さっぱり原因が掴めない。

「薰っ！染谷を海に沈めてきてえっ!!」

おいおい、なんて物騒な……………

咲はすっかり興奮しきってしまい、千鶴子を見ても同意するようになんげんと頷くだけで事の発端を言おうとしない。すると、

「じ、昂……………」

と少し焦ったような染谷君の声が聞こえた。

それもそのはず。

昂はさつきからうつすら笑みを浮かべているだけで全く目が笑っていないのだ。

隣に立っている私でさえ、今の昂に纏わり付いている冷たいオーラに背筋が凍りそうになっている。

「染谷に藤堂？お前ら、こんな白昼堂々女の子泣かして何やってんの？しかも周り巻き込んでまで」

昂の咎めるような冷たい口調に、染谷君と藤堂君が顔をひきつらせる。

「ち、ちげえんだ！誤解すんなよ、昂！そもそもコイツがすつげえ失礼な発言するから……」

「何やおっ！！もとはと言えば染谷がいけないんでしょっ！？」

あー……、こんな感じですっと言葉の応酬が続いてたわけか。これじゃあまるで子供のよくある喧嘩、だ。

ムキになって言い返すうちに、ここが公共の場であること、自分が「高校生」であるという自覚でさえも忘れて夢中になってしまったんだろう。

そりゃあ目立つよなあー。なんて妙に納得していると、突然、

「はいはい！私が事のあらましを説明いたしましょう！」

と、どこからともなく理子が加わってきた。

「理子！？今までどこにいたの！？」

「んー？出るタイミング計って待機してたのよ」

「は？」

「だってみーんな聞く耳持たずで埒が明かないんだもん。いくら止めようとしても4人の争いに拍車をかけるだけだし、ここは我らの頼もしきキャプテンを呼んでこの場を収めて頂いてから、と思いまして」

不思議と女子バスも男バスもお互い自分たちのキャプテンの言う事

には比較的従うのよねー、と理子は笑いながらそんな事を言う。

か、確信犯……？

「って言っても説明するほどの事でもないのよね。だって言ってる事が多少違うだけで後はほとんど内容一緒なんだもん。単なる子供の争いみたいなもんよ。最初っから見ただけじゃわからないからどうしてこんな言い争いにまで発展したかは分からないけど」

さらりと言つてのける理子に、咲と染谷君がぐつと言葉を詰まらせる。

ち、ちよつと待つて理子……

それって結局はつまり理子も原因が分からないって事？

心の中で冷静に突っ込んでいると、咲が掠れた声でぼそぼそと話し始めた。

「私は単に薰のスタイルの良さが羨ましかっただけで……あんなふうになれたらなあ……」

は、はい？

わたし？

「そう千鶴子と2人で話してただけなのに……なのにつ！いきなり染谷が話しに加わってきて『バカか？お前が波風みたいになれるわけねーだろ？よくまあ、あるかないかの胸ぺちゃんこの癖にそんな事言えるよなあ。無謀すぎるにもほどがあんだろ』とか言ってくるから悔しくなっちゃって……！！どうせ体に凹凸ないし胸だつてないしそんな事嫌でも自覚してたけど、わざわざ再認識させるよう

なことをいう染谷に腹が立ったのよおっ!!!」

ぼろぼろと涙をこぼしつつ声を荒らげる咲。

「うわあーありえないわね染谷君。そんな人だとは夢にも思わなかったわ」

理子が冷めた視線を染谷君に向ける。

「お前、そんな事言ってたのか？」

と何故か藤堂君まで驚いた表情を浮かべた。

……どうやら途中で援護に入ったためそこまでの事情を知らなかったらしい。

「……なにやってんだよ、染谷」

昂が深くため息をつく。

周囲の視線も染谷君にとって痛々しいものにすっかり変わってしまった。

「……っ、確かにそれは俺が悪かったよ！ほんの冗談のつもりだったんだって！けどそしたらコイツが『なによっ！！アンタなんてたいてい練習もしないからレギュラーにいつつも入れなくて、その癖無駄にカツコつけてんじやない！！女の子達に愛想振りまいちゃってさ！！今日も海にナンパしにきたんでしよう？ばっかじゃないの！？もう一回鏡でもその顔見直してくれば!?!』って言うから……」

「本当の事でしょ!?!」

「あんだと!?!大体なんで俺が海にナンパしに来たなんて決め付けるんだよ!?!」

「だってそうじゃない！！女の子達に顔をデレーっとさせちゃってさ」

「なっ！？あれはたまたま道を聞かれただけで」

「はいはい、ストロップ」

また再発してしまいそうな勢いに思わず私は中断の声をかけてしまった。

だってこんなに分かりやすいのに……

なんでこの2人は気付かないんだらう？

「まずは染谷君。女の子にそんなデリカシーのない言葉は言うべきじゃないよ、冗談だとしても」

「……………」

気まずそうに染谷君が黙り込む。

「それにそんな態度じゃいつまでたっても気付いてもらえないよ？素直に自分の気持ちを話したら？」

「…えっ!？」

染谷君が驚いたように顔を上げた。

「バレバレだよ染谷。お前隠してるつもりだったかもしれないけど」

昂がニヤリと染谷君に笑いかける。

あ……昂もどうやら気付いていたようだ。

他の皆といえはさっぱり言ってる意味が分からないらしく、首を傾

げているし理子は隣で「ちよつとーなにそこだけで会話してんの？
仲間に入れなさいよー」と不満そうに文句を呟いている。

染谷君はたぶん咲のことが好きなんだと思う。
たぶん、じゃなくて間違いない、かな？

染谷君が咲に対してとった態度はいわゆる「好きな子だからいじめ
てしまう」と全く同じ現象なわけで。

こんなに一目瞭然なのに、咲もみんなもなんで気付かないんだろう？

染谷君はパクパクと金魚のように口を開いたまま、顔を真っ赤にし
ている。

……よほど私たちの言葉が意外だったらしい。

昂がその顔を見て小さく噴出していたのに気付いたのは…おそらく
私だけだった筈だ。

「それからさ、ハセガワ長谷川」

「は、はいっ!?!」

まさか昂に名前を呼ばれると思わなかったのか、咲が咄嗟にした返
事の声が見事裏返った。

あ、ついでに「長谷川」って咲の名字のこと。

「染谷はちゃんと練習頑張ってるよ。シュート練だつて人一倍やつ
てるし。染谷がレギュラーに入ってるねえのは前に怪我したときの足
がずっと不調だから。病院に通ってること長谷川なら知ってるだろ
?」

「あ……」

どうやら心当たりがあるらしい。

咲がしゅんとうな垂れる。

私は咲の頭にぽんと手を置いて覗き込むように尋ねた。

「咲はさ…、染谷君が女の子と話したりするのを見てイライラしたりしなかった？」

「え？………あ」

ようやく自分の気持ちに気付いたようだ。

咲の頬が赤く染まる。

咲が染谷君に感じていたのは「嫉妬」という感情。

染谷君が好きだったからこそ他の女の子と話す染谷君の姿を見るのが嫌だったのだろうし、ムキになって言い返してしまったのだろう。

どこか自分に似通った気持ち。

……形は違うけど、私も昂に対して何度も感じたから。

だから、咲の気持ちが今は手に取るように分かったのかもしれない。

「わ、悪かったよ長谷川。無神経にあんなこと言ったりして……」

「ううん、私こそごめん。怪我のことだって知ってたはずなのに……」

「イヤ、いいんだ。あ、あのさ話したいことがあんだけど　　ち
よっと今いいか？」

「う、うん。私も染谷に話したいことがあるの」

どこからともなく拍手が沸き起こる。

海水浴に来ていた客ですら涙ぐんでいる始末。

「そういうことね……」と理子が後ろで納得したようにぼやいていた。

お互い顔を真っ赤にして海岸の端に向かって歩いていく咲と染谷君の2人の後ろ姿を見つめながら、私と昂は顔を見合わせて笑った。

「ホント世話が焼けるっつーか……傍迷惑な奴らだったな。あとで思いつきり説教してやんなきゃ」

「うん…まあ何はともあれ無事うまく収まったから良かったよね」

「ああ。にしても、あいつらホント分かりやすかったよな」

「くすくす…顔2人とも真っ赤だったしね」

ホントあの2人、上手くいってくれたらいいな。

私と昂とは違って……想いは一方通行なんかじゃないんだから。

私の代わりにも、両想いになってほしい……だんだんと夕陽に染まりかけている空を見上げながらそう心から願った。

「薫……、アンタって他人のことには鋭いくせに何で自分の事になると途端に鈍くなるわけえ？」

「え？理子、今なんか言った？」

「なんでもありませんっ！ほらっ、薫……！遊べる時間あとちょっとしかないし早く泳ぎにいこっ……！」

「うん！」

その時わたしは。

昂が切なさうに私を見つめていた事に

これっぽっちも気付いてなんていなかった。

17 (後書き)

数箇所訂正させて頂きました。

すでに読んでくださった方々、ごめんなさい。

夕氷嘩

その日の晩、合宿最後の夜ということもあって女将さんが用意してくれたご飯はとても豪華なものだった。

「御代わりはたくさんありますから、遠慮せずにどんどん食べてくださいね」

地元の旬の魚やあわびなど主に海の幸で彩られた食卓。

特にぷりっぷりの大きくて新鮮な海老は舌が蕩け落ちてしまつんじゃないってぐらい美味しく、ひとくちひとくち噛み締めながら幸せな気分浸つてしまう。

「やつべー、マジうめえ！…ってオイ！それ、俺の蟹だぞ！勝手にとるんじゃない」

「ケチケチすんなよ！つーかお前、一人で食べすぎなんだよさつきから！」

男子達の席ではなぜか小さな喧嘩まで勃発している。

……なんだかまるで家庭の食卓でよく見られる兄弟喧嘩のようだ。女子達もそんな様子を見て可笑しそうにくすくす笑っている。

女将さんの言葉に甘えて料理を堪能させてもらった後、各自部屋に戻ることになった。

部屋に入るやいなや、我慢できずに畳にごろんと横になる。

「あーだめ。お腹いっぱい動けない…」

「何やってんのよ薰。部屋に入るなり」

理子が半ば呆れたように眩きつつ、スリッパを脱いで部屋に入ってくる。

前から思っていたけど、畳ってなんでこつも癒されるんだろう？日本人の気質に合っているからなのかよく分からないけれど、家がフローリングだからか畳ってすごい新鮮で全然飽きることがない。横になっているだけで眠気に襲われそうである。

もう何もかも忘れてこのまま眠っちゃいたいかも……

この昂への想いも。

今までの苦い思い出も。

すべて忘れて断ち切る事が出来たら、どれだけ楽なんだろう？

でもそれも今日で終わる。

今晚、体育館で ……

「薰ってば！なに寝てるの!？」

「んー」

いつのまにか本当に眠っていたらしい。

体をかくかくと揺さぶられて、しぶしぶ目を開く。

すっかり乾ききってしまった目が痛い。

「うわっ!!……………ってなんだ、咲か。驚かさないでよ」

視界に飛び込んできたのは、顔のドアップ。何故か咲が私の上に跨マタガっていた。

「くすくす…びっくりした？」

「びつくりするも何も…なにか用？」

「あのね、報告をしようと思…」

『あああ』

『!!!!!!』

突然の叫び声に咲の言葉がかき消された。

鼓膜が破れてしまいそうなほどの大声のもとに（咲に跨られていて体が動かせないため）目を向けると、同室である残りの4人がコンビニの袋を抱えて部屋に入ってきた。

どうやら寝ていた間に、コンビニに買い足しに行っていたようだ。

「な、な、な」

ひとり驚愕の表情を浮かべて口をぱくぱくしている理子に首を捻る。

…なにをそんなに驚いているんだろう？

「さ、さささ咲！アンタ、私の薫に何してんのよ！？」

「なにつて ……襲ってる？」

「はあああああ！！？」

ええ？

何それ、初耳なんですけど…

ふと今の自分の置かれている状況を思い出して、すぐに納得した。見ようによっては咲に襲われているように見えなくもない。

……ありえないけどね。

喚き叫んでいる理子を尻目に、咲は笑いながらひょいと体を退けるとそのまま正座して座る。

「あの、ね。みんな揃ってから報告しようと思ってた事がありました
て」

緊張したような咲の声に暴れていた理子の動きがぴたっと止んだ。
どこか咲の頬に赤みがさしているように見える。

……あ、もしかして。

「咲、まさか…」

「そのまさか、デス。えーっと、染谷と付き合う事になりました…。
その節はみんなに迷惑かけちゃってごめんなさい」

「ええ　　!?!」

咲はそう言っただけで恥ずかしそうに笑った。

だけど、すごく幸せいっぱいな表情で。

そんな顔を見ていたら説教する気なんてとても起きなかった。

今頃、染谷君もニヤけちゃってるんだろうなあ……
よかった。無事に2人ともくっついて

「……………」

ま、待つて。

何かとんでもなく重要なことを忘れてないか？

……薫。今日の夜、体育館に来い。話があるから

「……………」
「……り、理子?いま、何時か分かる?」

「今?えーっと……7時半ちよつと過ぎ、かな」

「……………」
「……っ!ごめんっ、ちよつと出掛けてくる!」

「は！？薫っ！？」

理子の呼び止める声を背にして、慌てて部屋を飛び出た。

ありえない。

いくら眠ってしまったからとはいえ、昂との約束を一瞬でも忘れてしまっなんて…！

本気で自分の神経を疑いたくなる。

昂をここまで振り回しておいて、約束に遅刻するなんて本当に一体何様だというのか。

どうしよう。

昂はもう体育館にいるのだろうか？

自動販売機の前を通り過ぎ、廊下の角を曲がったときだった。

「……うわっ！」

いきなり人影が視界に飛び込んできて、反射的に足を止める。

「すみま　　っ」

視線を上げて相手の姿を捉えた瞬間、思わず言葉を失った。

「…波風さん。あなたに話があるの」

自分よりも一回り小さな彼女。

ストリートでさらさらとした彼女の綺麗な長い髪がふわりと揺れる。

「さ、くらざか、さん　　…」

男バスのマネージャーであり、昂の彼女でもある人。
そこに居たのは紛れもなく櫻坂^{サクラザカ}亜美、その人だった。

目の奥で揺らめいているのは、明らかな憎悪の色。記憶を遡らせても、はっきりと頭の中に残っている。今までに何度もぶつかってきた強い視線。

「私が言いたい事は分かってるわよね？」

櫻坂さんが何の事を指しているのかはすぐに分かった。黙ってその言葉に小さく頷く。

「……そう。なら話は早いわ。これ以上昂に近づかないで」

……『昂』

彼女なんだから呼び捨てなのは当たり前なのに。

そんなのは筋違いだと分かっているけど、奥から這い上がってくる「嫉妬」という感情を抑えられなかった。

なんて滑稽なんだろう。

いくら嫉妬したところで変わるものなんて何一つないのに。

「昂とあなたが幼馴染だということは前々から知っていたけど……ちよつと図々しすぎるんじゃない？彼女でもない癖に」

え？

びっくりして俯けていた顔を上げる。

私と昂が「幼馴染」であるという事実は理子と暁君のおそらく2人しか知らないはずだった。

中学からほとんど昂と喋ってこなかったから、誰も気が付くわけが

ない。そう思っていたのに。

私の疑問を見透かすかのように、櫻坂さんが口元を上げた。

「バカじゃないの？ 昂から聞いたに決まってるじゃない。昂はなんでも私には話してくれるんだから」

それだけ親密な関係なのよ　その言葉はまるでそう言っているように。

ちくりと鋭い痛みが胸を走る。

櫻坂さんは私の顔を見てからぶつと吹き出した。

「ふふ、ひどい顔。真っ青になってるわよ。大丈夫？」

余程ショックを受けたような顔をしていたのか　私の顔を見て可笑しそうにくすくすと笑い続ける。

羞恥で、かっとな顔が熱くなった。

櫻坂さんはなぜかじつと私の顔を見回した後、また笑い始める。

「にしても…ホントにあなたって男みたいね」

は……？

どこか馬鹿にしたような言葉に、なぜだか分からないがカチンとくる。

そんなの……そんなの言われなくても嫌と言うほど自覚している。子供の頃からずっとそう言われ続けてきたのだ。

櫻坂さんのように、可愛さも、女の子らしさも自分は何一つ兼ね揃えてない。

今更どうこう出来るものでもないから、とっくに諦めてはいたけど……だからと言ってなにもわざわざ再認識させるようなことを言わなくてもいいのに

思わずそう反論しそうになって口を嚙^{ツゲ}みながら、ふと思う。

……だけど。

だけでもし、仮にその要素がひとつでも自分になれば、昂は自分のことを「女」としてちょっとは気にしてくれたのだろうか……

そこまで考えて、慌てて首を横にぶんぶん振った。

馬鹿か、わたし……

そんな仮定をしたって何の意味もないのに。

「昂の言ってた通りね。くすくす……そうね。あなたには特別に教えてあげるわ」

昂が言ってた……？

意味が分からず眉間にしわを寄せると、櫻坂さんが得意気に微笑んで言う。

「この前、昂が言ってたのよ。『アイツ幼馴染だけど男みたいにか思えないし、ぶっちゃんけ告白されても迷惑なだけなんだよな。』って」

……え？

「でも、ほら。昂ってあの通り優しいじゃない？あなたのせいです
っかり気に病んじゃったみたいで練習でも調子悪いし……。だから
これ以上 幼馴染 を理由に付き纏って、彼を苦しめるのはやめて
くれないかしら」
「……っ」

頭の中が急に真っ白になった。

櫻坂さんの声が遠くなる。

心臓のドクドクと波打つ音が全身に逆流していくかのように伝わっ
ていく。

「……」アイツ幼馴染だけど男みたいにしかなれないし、ぶっちゃ
け告白されても迷惑なだけなんだよな」

分かっていた、はずだった。

自分の気持ちが昂を困らせていることも、
昂と櫻坂さんの間にとって邪魔でしかないことも。
昂に告白した時だって「友人」という関係も壊れてしまう事を覚悟
していた筈だった。

なのに昂の普段と変わらない様子にどこか安心して、昂の「優しさ」
に流されて ……
昂は私が傷つかないように振舞っていてくれただけなのに、その事
に気付かなかったせいで逆にもっと昂を苦しめる結果になっていた
なんて……

…なんで気付かなかったんだろう。

「おさななじみ」なのにそんな事も気付かなかったのか、私は。

「やだ、泣いてるの？」

え……？

櫻坂さんの言葉で初めてそのことに気が付く。

うそっ……！

慌ててごしごしと右腕で涙を拭くと、目の前にいる櫻坂さんの表情が険しく歪んだ。

「…なんであなたが泣くのよ？泣きたいのはむしろ……むしろこっちの方なのに！」

突然、語尾が強まった口調に驚いて目を見開くと、今までのどこか余裕そうだった表情は完全に彼女の顔から消え去っていた。櫻坂さんの唇がわなわなと震えている。

言葉に詰まって黙り込んでいると、しびれを切らしたように櫻坂さんが叫んだ。

「ホントに…なんであなたなのよ！あなたさえ邪魔しなかったら…っ…あなたなんていなければ良かったのにつっ！！」

大きな目から耐え切れなかったようにぼろぼろと涙が零れ落ちた。彼女の小さな体が小刻みに揺れる。

泣いている彼女の姿はどこか扇情的で、あまりにも綺麗で……

……ああ、本当に昂のことが好きなんだな。

自然とそう思った。

ぎゅっと唇を噛み締める。

彼女はこんな小さな体でどれだけ苦しんでいたんだろう。

今までの牽制するような視線だって昂を想う故の行動でしかない。

私は ……

「うめ」

ごめん。今まで邪魔して、苦しめて。

もう昂に近寄ったりしないから。

そう、謝ろうと思った次の瞬間のことだった。

「これ以上、私と昂の間を引き裂くような真似は二度としないでっ
っ!!」

いきなり頬に焼け付くような痛みが走る。

叩かれたのだと気が付いたのはその3秒後だった。

呆然として彼女を見つめ返すと、彼女の目にはただ憎しみの炎しか
籠っていない。

彼女の右腕が再び、振り上げられた。

まずいつ……また……!

叩かれる!

反射的に身構えて目をぎゅっと閉じた時だった。

「やめろよ、櫻坂!」

静寂な廊下に突然響き渡った大声。
振り下ろしかけていた櫻坂さんの腕は伸びてきた手に押さえつけられていた。
この声は

「暁君!？」

なんでここに!？

「ちよつと!？なんなのよ、いきなり!! 暁君には関係ないでしょ!? 腕を放してっ」

暁君から逃れようと必死に抵抗するが、力の差は歴然なわけで息を切らしながら櫻坂さんは長身の暁君を睨みつける。
が、まったくと言っていいほど暁君は無表情のままだった。

「女の喧嘩に口出すのもどうかと思ってたけど…暴力はよくないんじゃないか、櫻坂」

暁君の言葉に櫻坂さんは悔しそうにぎゅっと唇を噛む。

ち、ちよつと待て!!

暁君は一体いつからそこに!？

ま、まままままさか、ぜ、全部聞いてたとか…
つてことは…バレた!？

昂が好きだったことも全部暁君にバレちゃったわけ!？

「波風」

「八、ハイッ!!」

な、なに!?

いきなり名前を呼ばれて、体がびくりと跳ね上がる。
動揺して声が裏返っちゃったし…!

「いけよ」

「え?」

「いいから行けって、早く。 アイツ待ってるから」

「!」

弾かれた様に暁君を見上げると、暁君の真剣な目とぶつかる。

知ってる……!?

暁君の表情からは何も読み取る事は出来なかった。

だけど明らかに暁君が言ってる「アイツ」って……

「ちょっと!?!波風さんと話してるのは私よ!しかも行くってどこ」

に

「波風!?!」

暁君の声に押されるようにして、私は目的の場所へと駆け出した。

旅館の外に足を踏み出すと、すでに外は真つ暗だった。夏にしては少し肌寒く感じる外気に触れ、ぶるつと身震いする。慌てていたから上着をもつてこなかったが…

旅館の玄関の外に突っ立ったまま、頬にじんじんと熱く痺れる様な痛みが広がっていくのをただぼんやりと感じていた。

そういえば叩かれたんだっけ…、と今更ながら思い出す。

頬に残る冷たい感触。

手で触れると左の頬がじんわりと熱をもっているようだった。

櫻坂さん ……

申し訳なさで胸がいつぱいだった。

彼女の表情がちらついて頭から離れない。

悲しみと苦しみが入り混じったような表情……

叩かれたことに対して、悔しさも怒りも何も感じなかった。

感じたのは彼女に手を出させてしまった自分自身への怒り。

自分が彼女をあそこまで追い詰めた。

大体…なんで私はあそこで泣いたりしたんだろう。

櫻坂さんの言うように私は泣ける身分なんかじゃないのに。

悔悟カイゴの涙？

悲しかったから？だとしたら何に？

昂へ想いが通じなかったこと？

周りを巻き込んで色んな人を傷つけてしまったこと？
それとも愚かな自分に対して？

解らない。

今だって意に反して涙が頬を伝っていく。

そんな自分が心底憎らしかった。

本当に情けない。

お前はもう泣かないって誓ってたんじゃないのか！

心の中で自分に一喝する。

一体……いつから自分はこんなに涙脆くなってしまったんだろう。

少なくとも昂のことを好きになるまではこんなに涙腺は弱くなかったはずだ。

はは……まさかこれが「恋する乙女」ってやつなの？

……ってそんな可愛らしいもんじゃないか、自分は。

むしろ櫻坂さんだよなあ……その言葉がぴったりなのは。

自嘲気味に笑いながら空を見上げた。

都会の空とは違う綺麗な星空。

……『迷惑だって言ってたわよ』

「迷惑」。

いざその言葉を耳にすると、空から地上に一気に突き落とされたよ
うな気分だ。

……分かっていたはずなのにな。

こうなる事は分かっていたはずなのに、何であの時後先考えずに告白しちゃったんだろう。

ついカッとなつて、そのまま勢いに身を任せて
。 。
どんなに後悔しても、無駄なのに。

こればかりは自業自得だからしょうがない。
タイムマシーンで過去に戻れるわけでもないし、過去を新しく塗り替える事も出来るわけがないのだ。

なのに

今更後悔したところでどうにもならないと分かっているけど、どうしても自分の愚かさを悔やまずにはいられなかった。

「……………」

目を閉じて耳に届いてくるのは静寂の中に響く虫の音。
生暖かい風が時折頬を撫でていくのを肌で感じているうちに、いくらか心が落ち着いてきたようだ。

……
けじめをつけなきゃ。

昂のためにも、櫻坂さんのためにも。

そして何より自分自身のために

自分の優柔不断で曖昧な態度が理子や暁君や他人まで巻き込み、昂や櫻坂さんに迷惑をかけ傷つけてきたのだ。
償いには到底及ばないかもしれない。

だけど、今までずっと逃げてきたぶんきっぱりと決着をつけなきゃならない。

「よし」と宙を見据えて、踏ん切りをつけるように小声で呟いた。

この涙が止まったら、昂のもとへ行こう。

それで今までのことを謝って潔く振られに行けばいい。

笑顔で昂の言葉を受け止めよう。

だから今だけは……

この涙が枯れるまで

そう決心を固めた瞬間だった。

「薫？」

何の前触れもなく、風の音に紛れて耳を掠めていった低い声。

その声に思わずギクリと背筋をはる。

そんな、まさか。

ここにいるわけがない　　思考が回らない頭に空耳だと必死に言い聞かせる。

そう、ここにいるはずがないのだ。

だって彼は今、体育館にいるはずなのだから……

暗闇の中で小さく人影が動いた。

暴れ回る心臓を抑えながら、目を細めて相手の姿を捉える。

う、そ　　……

「なんで、」

驚きのあまり、言葉が続かない。

彼は自分との距離を2メートルほどにまで縮めてきた。

その瞬間、暗闇に紛れて影しか見えなかった姿が露^{アラウ}になる。

なんで…、なんでここに昂がいるの…!?

ロゴの入ったTシャツに黒いジャージを身に纏ったラフな格好。

彼の薄茶色の癖のある髪が風で靡^{ナヒ}いている。

いつも部活で見慣れているはずなのに、そんな格好もやっぱり様になっ^ていてついドキリとしてしまう。

こんな姿を見たらファンの女の子達なんて卒倒してしまうに違いない。

昂は突っ込んでいた手をジャージのポケットから出すと、呆れたように溜め息をついた。

「なんで、じゃねーだろバカ。お前がいつまで経っても来ないから迎えに来たの。俺、シュート練2時間もしてたんだからな」

に、にじかん!?

咄嗟に自分の腕を見つめる。

あ、ヤバ、腕時計持ってなかったんだっけ……

「あの…いま何時?」

「ったく、時計を家に忘れてきたのか?今ちょうど8時過ぎたと」

8時ってことは……6時からずっと待ってたの!?

6時っていつたらご飯食べ終わってからすぐってことだよね!?

とんでもない罪悪感が胸に押し寄せてくる。

「う、ごめん!…!謝つてすむことじゃないけど」!

「いいって。お前のことだから何か事情が」

なぜか昂はそこで言葉を区切ると、じっと私の顔を見つめてきた。

な、何?なんか顔についてる?

動揺を隠し切れず意味もなく自分の背後に目をやるが、そこに誰かいるわけでもない。

視線を昂に戻すとやっぱり昂は私を見ていた。

やっぱり私の顔に何か問題が?

…まさか虫がついてるとか。 いや、虫だったらいくらなんでも自分で気付くか。

「泣いてたのか?」

一瞬、なんの事を指しているのか分からなかった。

言葉につられて人差し指で目の下に触れると、冷たく濡れている感触に突き当たる。

やばい。

自分がさっきまで泣いていた事などすっかり頭から抜け落ちていた

……

「いや、これはさっきまで顔洗って

慌てて取り繕おうとするが、昂の怖いぐらい真剣な目つきにぶつかって思わず体が強張る。

どこか嫌な予感を胸に抱えつつ、私はごくりと息を飲み込んだ。どくどくと自分の激しい動悸だけが耳元に響いてくる。

「それにその顔」

昂はそう言っつて、労わる様にそつと私の左の頬に触れてきた。

昂の冷えた指先に頬の熱が奪われていく。

硬直したまま体が動かせなかった。

「…誰にやられたんだ？」

空気が凍りついたような気がした。

まるで時が止まったような感覚だった。

触れられた部分から麻痺していくかのように、体が動かない。

ヤケに熱いのは昂の指ではなく　私の顔？

「なあ……それ誰にやられたかって聞いてんだけど」

聞いた事のないような低い声に、思わずぶるっと戦慄が全身を走った。

何を考えているのか全く分からない表情が消された顔……

怖い。

昂の真つ直ぐな瞳に囚われてしまったかのように、昂から目が離せなかった。

昂の瞳に映っているのは、分かりやすすぎるぐらい動揺している情けない自分……

「　あ、ああ、ううん。ぶつけたんだ……えっと、そう。壁に」

自嘲的な笑いを浮かべようとしたが、顔がひきつる。

ああ、もう……！

この時ばかりは演技力のない自分が本気で憎らしい。

それでも何とかして笑顔をキープする。

「あはは……バカだよな。考え事してたらさーまさか真正面に壁があるなんて思ってもみなくて、気付いた時にはドカーン！みたいな、

さ」

腕を後ろに持つていつて頭をかきながら、あははと笑ってみせる。ただど私の作り笑顔の限界もそこまでだった。

(……………っ！)

明らかに怒っている目の前の顔。

「……………ふざけんな」

昂の指の微かな震えが頬に伝わってきた。胸を貫くような緊張が一気に押し寄せてくる。

すると、いきなり両肩を痛いぐらいにぐいつと掴まれた。

「……………っ！？」

「嘘ついてんのバレバレだつて…何度俺に言わせたら分かるんだよ。何でそこまで隠そうとする！？いい加減にしろよ！！それで相手の奴を庇^{カバ}つてるつもりなのか！？」

昂が声を荒らげて怒鳴ってきた。

その声に驚きながらも、理不尽な思いが胸に募っていく。

だつて

……………

だつて、言えるワケがないじゃん！！

相手は櫻坂さんなんだよ！？

しかも自分が招いた結果であつて、決して櫻坂さんのせいじゃないのに…！！

それが自分の好きな人の好きな人だったら、尚更言えるはずがないのにつ……！！！！

「……なんで……っ……」

声が口から僅かに漏れる。

なんで……なんで昂はここまで私のことを気にするの？優しくするの？

振った相手だから？

幼馴染だから？

わたしのこと……私のこと迷惑だと思ってるくせに……！！

心の中で何かが弾けた。

「なんで優しくするの！？なんで私に構う！？迷惑だったならハッキリ迷惑だと言ってくれれば良かったのに……！！」

違う。

本当はこんな事言いたいんじゃない。

昂が優しすぎるから気を遣っていてくれた事だって痛いほど分かっていたはずなのに……

昂の優しさを憎むなんて筋違いだって自分でも分かっているのにつ……

なのに口が止まらなかった。

一度溢れてしまったものを止めることができない。

「こんなんだつたら冷たくされた方が全然マシだった……！！！！昂が迷惑だと思ってることを知らない振りしてた私も最低だけど……こ

んな私に同情して優しくする昂も相当バカだよ!!!」

なんで「オサナナジミ」なんかになっちゃったんだろう。なんで昂のことこんなに好きになっちゃったんだろう。他の人を好きになつてたら、どんなに楽だった？

こんなに苦しい想いをするのも

こんなに昂を傷つけるような言葉も言わずに済んだのに……!!!

「お、おい？ 一体何の事言つて」

「昂こそもう隠さなくていいっ!! ごめん…ずっと気付かない振りしてて…もう二度と邪魔しないようにするからっ……」

もう、頭がぐちゃぐちゃだった。

自分でも何を言っているのか分からなくなってくる。

「今まで…今まで本当にごめん。私のこと昂ももう気にしてくれら必要はないよ…色々…気を遣わせちゃつてごめん…」

声が震えそうになる。

また目から零れそうになるものをぐっと堪える。

ダメだ!

今泣いたりしたら、また昂に気を遣わせる事になる。

もう少しだけ堪える…堪えるんだ!!

最後に…最後だけ……

私は瞼を閉じて一呼吸置いてから、ゆっくりと目を開けた。

そして精一杯、微笑んでみせる。
昂がはつと息を呑んだのが分かった。

「オサナナジミ」そして最高の笑顔で

「……………今までありがとう」

昂にそう告げると、私は昂の腕を振り切って形振り構わずその場から走り出した。

昂の声が聞こえたような気がしたが、風の音に遮られて耳にまで届いてくることはなかった。

いざ冷静になってみるとこんな顔で旅館に帰るのがマズイことに気が付いて、立ち止まる。
理子やみんなにまた心配をかけてしまうことは容易く想像できる……………
どうしたものかと悩んでいると、波の音がどこからともなく聞こえてきた。

海……………か。

気持ちを落ち着けるのにはちょうど良いのかもかもしれない……………

私はそう思い立つと、波の音に引き寄せられるようにして歩き始めた。

夜の海はひっそりと静まり返っていた。

揺らめいている海のうえに、ぼっかりと上弦の月が淡い光をはな
つて浮かんでいる。

その景色はどこか幻想的だった。

ひとつこひとりいない、真昼の賑やかな海とは真逆な姿に不思議な
思いを抱えつつ、私は波打ち際までゆつくりと近づいた。

薄汚れた靴と靴下を脱いで、裸足になる。

そっと足を下ろすと、触れた水は冷たくて心地よかった。

潮の匂いがふわりと漂ってくる。

しばらく水と戯れたあと、私は海から少し離れて砂浜に腰を下ろそ
うとした。

「……あ」

服に砂がつく……

一瞬ためらって動きを止めたが、まあいっかと思いつつ直す。

ぼーっと海を眺めていると、ついさっきの出来事が頭に蘇えってき
た。

ホントに最低だ……

あんなの単なる八つ当たり、じゃない。

昂は心配してくれたただけなのに、また勝手な酷いことを言っ
てしまった。

けっきょく自分は　　昂のことを傷つけるばかりなのだ…

急に自分に苛立ちが湧いてきて、隣の砂に埋もれていた貝の欠片を
掴んでぼいっと海に向かって投げる。

が思うように飛ばず、ぽてっと音を立ててすぐ近くに虚しくも落ちた。

「バスケットなのに……なんで」

なんでそこに落ちる。

バスケットとして自信がなくなるじゃないか。

むっとして貝に向けて文句を呟く。

「なにが？」

その声にハツとして振り返ると、暁君がいつのまにか隣に立っていた。

「うわっ！？ 暁くん、いつからそこに……！？」

「いつって今だけど……」

「あ、ああ、そう……」

貝を投げるまでの一連の動作は見られずに済んだらしい。

ほっとして息を吐き出してから、我に返って慌てて立ち上がる。

「暁くん、なんでここにいるの？」

私が暁君の顔を見上げてそう尋ねると、暁君は困ったような顔をした。

「なんでって……気になったからだけど」

何が？

…と聞き返そうとして、言うのを止めた。

そうだ。

そういえばさつき櫻坂さんに叩かれそうになったのを止めてくれて、昂のところに行けって言うてくれたんだよね。

……って。

「……暁君」

「なに？」

「さつきの……全部聞こえてたよね」

「ああ……悪い」

「はは、そっか……。みつともないなあ、私」

思わず苦笑する。

やっぱり聞かれてたのか……

ってことは必然的に私の昂への思いも……

急に沈黙があたりを包み込んだ。

暁君はおそらくこちらが何か言うまで何も言うてはこないだろう。

そんな彼の気遣いが胸にじんわりと沁みた。

「……あのね、もう聞かれちゃったから気付いてるとは思っけど……。私さ、昂のことが好きだったんだ……もういい加減諦めなきゃならないんだろっけどさ……」

言ったあとで、意外にもすんなり言えた自分に驚く。

もしかしたら誰かに今聞いてもらいたかったのかもしれない……

暁君はしばらく黙り込んでいたが、少ししてから話し始めた。

「ああ。知ってたよ、波風が昂のことを好きなことは……。だけどそれは、あそこで偶然鉢合わせたから知ったんじゃない」
「え？」

意味が分からず、眉間にしわを寄せる。

「ずっと前から知ってたよ。だって俺、ずっと波風のこと見てきたからさ」

えっ、と驚きのあまり叫んだ声が見事裏返ってしまった。

な、なななにっ!?

いま、暁くん、なんて言った……。!!??

波風のことを……。ってええ!?

一体どういう意味!?!?!

私のあまりの慌てっぷりが可笑しかったのか、くくつと暁君が籠った声で笑い始めた。
その途端、顔が真っ赤になる。

じよ、冗談!?

そんな冗談ってアリなのか!?!?

「ちよつと!?!暁く　んんっ!?!?!?」

咎めようと思った瞬間、顔を抱え込むようにしていきなり抱きしめられた。

頭上から声が降って来る。

「冗談なんかじゃない…。

好きだ、波風。アイツじゃなくて

俺にしとけよ……アイツみたいに泣かせたりしないから」

ドツドツドツドツ……

不規則に鼓動が勢いよく波打ち始める。

予想外の出来事に意識が飛びそうだった。

暁君が私のことを好き……！？

体が強張って動けないでいると、ふいに腕の力が緩められた。

疑問に思う間もなく、暁くんの顔が近づいてくる。

体がピキーンと凍りついた。

ま、ままままままさか……！！暁君、き、キスしようとしてる……！！

！？

い、いやいや、そんなまさか……

つて、顔どんどん近づいてきてるし……！！

確かに暁君はカッコいいし、寡黙だけど優しいし、イイ人だとは思
うけど……けど！

それはあくまで友達としてであって、そういう対象としてではない。

私が望んでいるのは、頭に浮かぶのは
りだけだ。 たったひと

「やだっ……！！！！」

唇があと1センチで触れそうになる前に、私は思いっきり暁君の体
を押し戻していた。

涙で視界が霞んでいく。

こんなに　　こんなに私は昂のことが好きだったのか。

その事実には愕然とした。

「…………ふう。やっと答え出たみたいだな」

その言葉にバツと顔を上げる。

暁君、ま、まさかワザと…………!?!?

暁君は少し苦笑いを浮かべて言った。

「悪い、こんな方法しか思いつかなかった…けど、気付いただろ？無理に諦める必要はないんじゃないか？それに…………波風はちゃんと昂から返事を聞いてないんだろ？」

なんで知ってるんだらうと疑問に思いつつ、言われて初めて気が付く。

そうだ…………きつぱり振られようと決心していたはずなのに。

なんだかんだで、私はまた昂の言葉から逃げ出してしまっていたのだ。

「もう一回伝えて、返事聞いて…………それからどうするか考えるよ。

そんなんじゃない前にも後にも進めないままだ」

暁君の言葉がすとんと胸の中におさまった。

無理にいま、諦める必要はない…………

今まで育んできた好きな気持ちを今すぐに消せるはずがないのだ。そんな軽い気持ちじゃなかった。

ちゃんと振られて、いっぱい泣いて、そしたらいつかこの想いも大切な想い出になる日がやってくるかもしれない……

何をやってるんだろう、私は。

暁君と言つとおりだ。

もう一度きちんと伝えて返事を聞かなきゃ、何も始まるわけがないのに。

「決まったみたいだな……じゃあ、体冷えるし戻るか」

「うん……あの、ごめん暁君……さっき思いつきり突き飛ばしちやつて……」

「いや、いいつて。こっちこそ悪かったな……まあギリギリまで抵抗しないからちよつと焦ったけど」

「暁くんっ！……！」

「ははっ、うそうそ。ほら戻るうぜ」

暁君はそう言つて、旅館に向かって歩き始める。

感謝の気持ちでいっぱいだった。

久しぶりにすがすがしい、心が晴れたような気分だ。

ありがとう　　暁くん。

私は声に出さずに心の中でそう呟くと、暁君の背中を追つよつたして旅館へと歩き始めた。

何か様子が変だと気が付いたのは、旅館から少し離れたところまでたどり着いたときだった。

あれ？

なんで……

旅館の前にちらつく影。

よくよく目を凝らして見ると、どうやら後輩の子たちのようだ。何やら落ち着かない様子で旅館の前を行ったり来たりしている。

……何かあつたんだろうか？

暁君と思わず目を見合わせる。

すると、ひとりの後輩の子が私たちに気付いて「あつ！」と叫んだ。その声に他の後輩たちの視線も一斉にこちらに集まる。

「…先輩！」

「先輩っ！大変なんですっ」

「どうしたの？」

どうやら、旅館の前で彷徨っていたのは私と暁君を捜していたからのようなのだ。

私たちの姿を目にするなり慌てて駆け寄ってきた後輩の子達は、今にも泣きそうになっていた。

海なんかに寄っているんじゃないかと今更ながら後悔する。

「落ち着け。いったい何があつたんだ？」

暁君が宥めるように尋ねると、後輩の子はハッと我に返ったように一瞬動きを止めてから、震えた声で言う。

「な、楠原先輩がっ……」

「えっ」

思わず声が裏返った。

まさか今出てくるとは思わなかった名前に、心臓が大きく跳ね上がる。

人が人だけにどう反応したら良いのか分からず、一瞬浮かぶ曖昧な表情。幸い、後輩の子には辺りの暗さも手伝って気付かれることはなかったが…

体内に駆け巡る嫌な予感。

昂に何かあったのだろうか？

「まさか アイツ」

咄嗟に頭が回らなくて立ち尽くしていると、暁君が何かを思い出したように顔を上げたかと思いきや、次には旅館の中へと駆け出していた。

いきなりの事に不意を衝かれ、私は一瞬呆気にとられたが、我に返ると慌てて後を追った。

なにが …

何があっただらろう？

必死に暁君の背中を追いながら、身体中が漠然とした大きな不安に駆られていく。

暁君もなにか心当たりがあるみたいだし ……何より後輩の子達があんな状態だったのだ。何も無い訳がないのだけど……それでも長年の付き合いからしても、あの昂が何か騒ぎを起こすようには考えられなかった。

2階へと脇目もふらず駆け上っていく私たちの様子を見て、偶然居合わせた榎本先生が首を傾げている姿が目に入った。ただどそんな事に構ってられる余裕もなく、何とか2階へとたどり着く。

(……………!)

廊下に出ると、なにやら言い争っている声が奥の部屋から聞こえてきた。

一瞬その声に驚いて足を止めたが、暁君と目を合わせて、すぐにその部屋を指して走り出す。

いったい……何が起きてるといふの？

すでに部屋の前には他の後輩たちが、困惑した表情で部屋の中を見つめて立ち尽くしていた。

悲鳴やら叫び声が入り混じって部屋の中からここまでではっきりと聞こえてくる。

ただ事ではない様子に、一瞬足が竦みそうになった。

な、に？

嫌な予感を胸に抱えたまま「ごめん、ちょっといい？」と驚いて自分たちを見つめてくる後輩たちの間をくぐり抜けて、部屋の中に駆

け込む。

部屋に入った瞬間、目にした光景に体が固まりついた。

力が抜けたように座り込んで泣き崩れている櫻坂さんと部員達に取り押さえられている昂の姿　　見たことのないような昂の冷酷な表情に周りで怯えている部員も茫然としてこの光景を見つめている。

「お、おいっ……落ち着けて昂！！仮にも相手は女なんんだぞ！」

染谷君が必死の形相で食い止めようとしますが、昂は染谷君を一瞥すると、自分に纏わり付いてた腕を一瞬にして振り払った。激しい感情が籠められた目に、染谷君が「ひっ」と悲鳴に近い声を上げる。

昂は櫻坂さんの方に向き直ると、冷たい眼差しを向けた。その瞳に泣いていた櫻坂さんの体がビクリと大きく震える。

「なあ…櫻坂。俺、言ったよな？お前との遊びはもう終わりだって…もともと遊びでいいからって承諾したのはお前のほうだろ？」

嗚咽を漏らすばかりでなにも答えられない櫻坂さんに、昂はふっと唇の端を上げた。

それはまるで蔑むような冷たい笑みで。

櫻坂さんの表情がさつと青褪める。

いつもの明るくて優しい彼は一体どこにいつてしまったのか

……

部員達も困惑した表情を隠しきれずに、誰も一言も喋らないまま、息を呑んで事の成り行きを見つめている。

「……薫に手を出すのはルール違反じゃないのか」

低くて重みの増した、咎めるような声。
櫻坂さんはぐつと詰まって、そのまま鋭い視線を避けるように俯いた。

……え？

手を出したって　もしかして、さっきの事？
な、なんで昂がその事を知ってるの？

「悪い　あの後、俺が昂に話しちまったんだ」

「え　？」

呆然としていた私に、暁君が説明する。

背中を向けている昂は部屋に入ってきた私たちにまだ気が付いていない。櫻坂さん　いや。理子や染谷君、部屋にいる部員すらその場の剣呑とした空気に呑み込まれてしまった様に、自分たちの姿すら目に入っていないようだ。

だからって…… たった一回頬を叩かれただけで、なんで昂が怒るの？
櫻坂さんと遊びって　…… どういうこと？

昂の言葉がぐるぐると頭の中で渦巻いていく。

「だって…… だって、私、昂のことが好きだったのよ！ 遊びでいいなんて嘘に決まってるじゃないっ……！」

振り絞ったような、悲痛の叫び。

櫻坂さんの気持ちは嫌というほど分かって、体が竦む。

「……」

「近くにいらればそれで良かった……それなのに波風さんが邪魔しようとするから……っ」

「 違うだろ」

「…え？」

「櫻坂 お前が本当に好きなのは…前に言ってたアイツじゃないのか？自分でも薄々気付いてんだろ」

「！」

昂の言葉に櫻坂さんはハッと顔を上げた。

大きく目を見開いたまま、昂を青褪めた表情で見つめている。

「な、なにを…」

「いい加減、もう気付いてんだろ。」

とにかく、俺は俺でお前

を利用させてもらってただけだ。悪いけど…お前とはもう付き合え

ない」

「…っ」

きつぱりと告げられた言葉に、櫻坂さんは唇をかみ締めると、耐え切れなくなったように部屋の外へと駆け出していつてしまった。

「櫻坂さ っ」

咄嗟に引き止めようとするが、名前を呼びきる前に後ろからぐいと右腕を掴まれた。

驚いて振り向くと、そこには呆然とした表情の昂がいた。

「お前 、いつからそこにいたんだ？」

「い、いつからって言われても…」

結構前からなんだけど。

…なんてまさか言えるわけもなく、視線を泳がせる。
正直、頭の中がこんがらがったままで、自分自身ほとんど今の状況を理解しきれていないのだ。

「…って、昂！それどころじゃないって！櫻坂さんが…」

あんな状態で外に出て行ってしまった彼女を放っておけるわけがない。

昂の腕を振りほどこうとするが、離してくれる気配がまったく見られなかった。

…っ、なんで!?

訴えるように昂を見上げると、昂は小さく息をついた。

「櫻坂には…悪いことをしたと思ってる。だけど今は…薫。先にお前に話したいことがある」

「…っ！」

真正面から目を合わせられて、私は動揺を隠せなかった。

…こ、こんなのって反則じゃないの!?

好きな人に見つめられて、平常心を保っていられるはずがない。

特に昂の瞳は…なにか特別な魔力がこめられているのではないかと思うぐらい、絶大な威力を発揮するのだ。

もしかして…確信犯なわけ？

もしそうなら、これほど悔しいことはないかも…

所詮、「惚れた弱み」とかいう奴なわけか？

「楠原」

意識を引き戻して声の主に顔を向けると、いつのまにか理子が部屋のドアの前に立っていた。

しばらくの沈黙があつて、理子はふうつと大きなため息をついて言った。

「櫻坂のことは私たちに任せて。アンタ、今まで散々薫のと傷つけてきたんだから、ちゃんと話しなさいよ。言つとくけど、私まだアンタのこと全然許したわけじゃないから」

「ああ」

「ほらっ、ちよつとあんた達も早く部屋から出なさいよ。邪魔するのは野暮つてもんよ」

理子の言葉に促されるようにして、部屋に集まっていた部員たちはしぶしぶ順に部屋の外へと出て行く。なぜか彼らが残念そうな表情を浮かべていたのが気になるけど……

な、なんで？

……っていうか、なんでいきなりこんな事になつてるの!？

更に理解しがたい状況に追い込まれていることに気が付き、慌てて理子たちの後を追おうとするが、腕は硬くつかまれたままで。無常にも「バタン」と扉の閉まる音が部屋に響きわたる。

部屋中に広がる気まずい沈黙。

心臓は荒れ狂うように波打っている。

確かにさっき、もう一回ちゃんと昂と話そうと決意した。

だけど、その時はまさかこんなに早くその機会が訪れるとは思って
いなくて。

人間、何事にも心の準備ってものがあるというのに ……
今でも、昂とふたりきりでこの部屋にいるという事実が信じられな
い。

夢だつて言ってくれるほうが、よっぽど現実味があるってもんだ。

「…薫。そのままでもいいから、俺の話聞いてくれないか？」

その言葉に足が震えそうになるのをぐつと堪える。

昂が話したいこと。

大体予想はつくけど ……

たとえ振られても、じぶんの気持ちだけはもう一度だけちゃんと伝
えようと思った。

だけどやっぱりどこか臆病になつてる自分もいて、情けないことに
口から出てきたのは「うん…」という掠れた返事だけだった。

歯を喰いしばって、じつと昂が話し始めるのを待つ。

全身にまで震えが回ってきて、立っていられるのもやっとなぐらい
だ。

「俺は……」

ごくん。

自分の喉が緊張からか鳴るのが分かる。

あたりを包み込む張り詰めた空気。

昂はいったんそこで言葉を区切ると、小さく息をついて天井を仰い
だ。

「……俺、前までずっと薫には嫌われてると思ってたんだ」
「は？」

き、嫌われてる？

…って私が、昂を嫌ってるってこと！？

思いもしなかった言葉に思わず口をぽかんと開ける。
相当間拔けな顔をしていたに違いない。

昂は「ああ」と頷くと、極まり悪げに言った。

「小学校の時まではさ、割と…っていうか結構仲良かったじゃん？俺ら。なのに中学に入ったらいきなり疎遠になって…話しかけようとしてもお前は無視するしさ。嫌われたのかな、ってこっちはかなりシヨックだったんだぜ？」

「そ、それは…」

中学に入って更に人気者になっていった昂。

もちろん昂の周りには羨ましいぐらいいつも人が集まるようになっていて…

それが昂の人徳の成せるわざだとは分かっていたけど…

たぶん、シヨックが大きかったのは昂より私のほうだ。

昂が私だけのものじゃないと頭では分かっていたても、抑え切れなかった嫉妬心。

昂が私から離れていくのなら、私も昂から離れてやる…と変に子供っぽい闘争心が働いて、つい昂から話しかけられても、嬉しいくせに素直な反応ができず、結局無視してしまったことがあった…気がする。

加えて女の子にも何度も告白されていたのは噂で聞いてたし、仲良くして他の子達からやっかまれるのを避けたかったのもあったし……
確かそれからだ。

昂と疎遠になったのは……
私から話しかけることも昂から話しかけられることも、キツパリとなくなってしまうた。

なんでもないふうに笑って毎日過ごしていたけど、本当はすごく寂しかったのを覚えてる。

思えば、すでにその時から私は昂のことが好きだったんだろう。

「俺、お前の事が好きだったから……薫に嫌われてるって分かって本当にショックで、ヤケになって何人も他の女と付き合ったりしたんだけど……やっぱり相手が好きな女じゃないと虚しいだけだった」

……。

ハイ？

ちよ……ちよっと待って。

今、なんて……？

「ち、ちちちよっと待って。好きって……誰のこと言ってるの？」

言ってることが理解できなくて慌てて尋ねると、昂はきよとんと私を見つめてきた。

私の戸惑ってる表情を確認すると、「ありえねえ」と昂がぼそっと呟くのが聞こえた。

「お前って……はあ……。分かってはいたけど相当鈍感だよな」

「どんか…！？ちょっと、さっきから何言ってるかさっぱり分かんないんだけど！？」

「だから、お前のことが好きだって言ってるの…！」

「…！！？」

その場の空気が固まった気がした。

目を見開いたまま、瞬きひとつせず目の前の顔を見つめる。

私と目が合つと、昂は顔を横にそむけてそのまま片手で顔を覆った。心なしか顔が赤くなってるように感じるのは…気のせい？

「なにを、冗談……」

やっと出てきた声は震えていて。

昂が…私を好き？

そんなのたちの悪い冗談にしか思えない。

それとも……

神様…私を喜ばせようとして今更、夢幻でも私に見させる気なの？
そんなの余計に悲しくなるだけなのに……
夢なら早く覚めてほしい。

だけどそんな淡い期待も、すぐに裏切られた。

「冗談なんかじゃない。ずっと…ずっと俺は、お前が好きだった。

さつき櫻坂がお前に言ったことも全部嘘だから。俺はお前を
迷惑だなんて思ったことは一度もない」

真剣な瞳にぶつかって。

どこまでも深い黒の海は、激情を宿していた。
身体が　　まるで自分のものじゃないかのように、動かない。

「高校に入ってバスケット部でやっと薫と話せるようになったときには本当に嬉しかったんだ」

「で、でもっ…！…だつて、櫻坂さんは　　！？」

櫻坂さんだけじゃない。中3の時に見た彼女だつて…

「櫻坂には特別な感情を抱いたことはなかった。他の女だつてそう
だ。あくまでもお前の代わりで遊びのつもりだったんだ。俺がやつ
てることは最低だつて自覚してはいたけど…。だけど薫に告白され
るまで、俺、まったくお前の気持ちに気付いてなくて…話せるよ
うになつてもやっぱりどこか余所余所しかったし、嫌われてるとば
かり思つてたから…。心底自分を軽蔑したよ。俺がしてきたことは
お前を傷つけてきたんだつてやつと気が付いて…めちゃくちゃ後悔
した」

昂が今話していることが信じられなくて、私はただ呆然と聞いてい
た。

もしかしてこれって…ドッキリかなにか？

そんな馬鹿なことを考えてしまつぐらい、頭の中はひどく混乱して
いた。

まさかこんな展開になるなんて…誰が予想できただろう？

必死に今の状況を理解しようとしながら、ふとある言葉が脳内に引
つ掛かった。

「……お昼ご飯のあとにねトイレに行こうと思っ
たら、なんと廊下で楠原君とウザザカが抱き合ってたの!!」

確か、温泉に入ってたときに誰かが言ってた言葉。

その時もやっぱりシヨックを受けて、理子に慰めてもらったんだ。
本当に私にはふたりの間に入る隙間さえないんだな、って実感した
んだっけ。

「嘘だ…だって、櫻坂さんと抱き合ってたって」

「…は？」

「だから、昨日、廊下で櫻坂さんと抱き合ってたって…!」

思わず声を荒らげてしまってから、ハッと我に返る。

気まずく感じながら昂の顔を見上げると、何故か昂は眉をしかめて
何か考え込んでいるようだった。

しばらくして、何か思い当たったように昂がいきなり顔を上げた。

「…まさか…アレのことか？」

「…アレ？」

話が読めなくて首を傾げる。

昂は小さく舌打ちすると、

「お前に告白された日の夜、櫻坂のこと呼び出してこれ以上
付き合えないって断ったんだ。だけど、アイツまったく聞く耳持た
なくて…結局、その日には解決できなくて仕方なく保留にする
しかなかった」

私が告白した日

……ってつまり、合宿の前日ってこと？

「ただどお前からの告白を聞いた以上どうしても早く蹴りをつける必要があったから、昨日廊下に呼び出したんだ。そしたら、いきなり抱きつかれて　　まさかそれが誰かに見られてたなんて思わなかった。言つとくけど　　俺はアイツを抱きしめたりなんてしてないからな」

「うそ　　……」

じゃあ、見間違いだっただの…？

「櫻坂とは…後でもう一度ちゃんと話をつけるつもりだ。散々お前に酷いことしてきたし、身勝手な言い分だっただけ分かってる。随分遠回りしてきたけど…、俺はもうこれ以上自分の気持ちに嘘はつけない。好きだ、薫。…俺と付き合ってくれないか？」

嘘でない分かる真っ直ぐな瞳に、私は何も言えなくなっていた。胸の奥で燻っていたものが少しずつ溢れてくる感覚

夢でも幻でもない。

紛れもない現実なんだと、やっと理解する。

「…泣くなよ」

気付いた時には、昂に抱き締められていて。胸がぎゅゅと締め付けられそうになるほど、低く掠れた声でささやかれる。

ずっとずっと好きだった。

叶わない恋なんだと何度も諦めようとした。

海で抱き締められた時より切なくて…熱い抱擁。

この温もりが本物なんだと思うと、手放したくなくて私は昂の背に腕を回していた。

それが合図のようにさらに強く抱き締められる。

昂を好きでいることを許された気がして、涙はもう止まらなくなっていた。

「…ほんとうに…本当に私なんかでいいの…？」

昂の顔を未だに信じられない気持ちで見上げると、なぜか昂の息を呑んだ音が聞こえた。

「…っ…、そんな顔するなよな」

「……え？」

「はあ…何でもない。…それにそれはこっちの台詞。お前こそ…本当に俺なんかでいいわけ？」

抱き締められたまま、顔を覗かれて。

こんな至近距離が経験なかっただけに赤面してしまう。

耐えられなくなって、思わず顔を俯けた。

目の前にいるのは…ほ、本当にあの昂なのか？と疑いたくなるほど熱い視線。

な、なんか…こういうのってかなり恥ずかしいかも……

「……薫？」

不安そうに揺れ始めた目の前の瞳。

そんな昂をじつと見つめながら、昂でもこんな顔をするんだな…なんて変な関心をしてしまった。

そんな自分が可笑しくなってくすりと笑ってしまっ。
私は顔を寄せると、驚く昂を無視して自分の唇を昂のそれにそっと
触れ合わせてからゆっくり離した。

ちよつとした消毒のつもりだったんだけど……

たぶん昂がその意味に気付くことはないだろう。

後から思えば、我ながらかなり大胆な行動だったと思う。

「昂のことがずっと好きだし……」

ああ。やっとちゃんと告白できるんだ……

…なんて思えたのに、言葉を最後まで言い切る前に気付いた時には
唇はもう塞がれていて。

それからしばらくの間離してもらえることはなく、結果的に流され
るまま身を委ねることになってしまった。

ずっとずっと好きだった。

叶わない恋なんだと何度も諦めようとした。

苦しくて苦しくて苦しくて……

それでもいつか報われることを願い、健気に咲き続けた一輪の花。

* アゼリアの恋・END *

22 (薰視点・完結) (後書き)

やっと薰視点、完結できました…^^;

もう本当になんでこんなに遅い更新ペースなんだろう、とただいま
猛反省中です…(汗)本当にすみません…!

この話は昂視点を入れて本当に完結する予定なので…(おいおい、
そんなこと言ったらいつこの話終わるんだ?)一応、しばらくした
ら昂視点やらまた別の人視点をばち書いていこうと思っ
ています。(疑問点も残しまくりだし…)

本当に超スローペースでしたが…こんな稚拙な文章に最後まで付き
合ってくださいの方々、本当の本当に有難うございました。

* アゼリア azalea…ツツジの花*

番外編 「youth」

俺の名前はカシモトヤサム榎本勇。

27歳、独身。

今のところ結婚する予定もまったくない、いわゆる独身貴族ってやつだ。

最後に付き合った彼女というのも、悲しいかな。かれこれ2年前のことになる。

いや、誤解を解いておくが別にモテないってわけじゃないぞ？

ただ過去に俺と付き合ってきた女はどれも合わなくて、結局「自然消滅」ってパターンが一番多かった。

大学時代はサークルとか合コンとか出会いの場はいくらでもあったけど、教師という職業を選択してしまったからは、そういう機会もめっきり減ってしまい。

気付けば、この有様…というわけだ。

俺も年とったよなあ、なんて変な感動を覚えてしまう。

まあ、そりゃいつかは結婚したいと思うけど。

でも今はいわゆる「教師」としてそれなりに楽しんでいるし、別に不満があるわけでもない。

最近では顧問をやってるバスケット部が男子も女子も力をつけてきてそれなりに大会で勝ち進むようになってる。おかげで何故か俺が校長に呼び出されて、お褒めの言葉まで頂いてしまった。

別に俺のおかげって訳じゃないんだけどな…

仮に俺のおかげというならば、もっと前から大会で名を連ねるようになっていてもいいはずだ。だが、はっきりと成長が目に見えるようになったのは今年あたりから。きつと…いや。間違いなく、アイツら二人が部長になってからだろう。

楠原 昂ナシバラ コウ と 波風 薫ナミカゼ カオル

…っか。

アイツらって一体どうなってんだ？

俺の目下の関心事。

それは今名を挙げた、まさにその二人にある。

てっきり付き合ってるかなんかだと思っていたんだが…

昨日昼間に偶然見てしまった光景を思い出し、思わず眉間にしわが寄る。

ちよつどトイレを済まし、廊下に出た時のこと。

部屋に戻ろうと自販のところを曲がろうとした時に、いきなり眼前に飛び込んできたものに驚いた俺は咄嗟に身を引いていた。

なにやってんだ？こんなところで…

一瞬しか見えなかったから自信はない。…が、もう一度確かめる勇氣もない。

だが…。

今のは確かに　　昂とマネージャーの櫻坂だったよな？

俺の見間違いでなければ、ふたりは抱き合っているように見えた。自販に寄りかかって、思わずため息を零す。

おいおい…

合宿中に随分と余裕なこった…

昂のことは教師陣でも噂になっっていることは知っていた。

そりゃあ、あの容姿だから当たり前と言っちゃ当たり前なんだが…噂と言っても悪い噂ではなく、もちろんいい噂。

もはや伝説と化してしまっているなんて、本人ですら知らないだろう。

ラブレターは毎日靴箱から滝のように流れ出てくるとか…

モデルや芸能人にならないかと何度もスカウトされてるとか…

老若男女問わず逆ナンされるとか…いや、さすがにこれは大げさなんだろうが。

だが、ほとんど事実に近いものがある。

アイツより10近く離れている大人の俺ですら憧れに近いものを覚えてしまうほど。

少年のように楽しそうな笑顔を浮かべる時もあれば、ドキッとするほどアイツはたまに大人の顔をする。

あれはいつだったか…アイツがまだ一年の時だったな。

当時の二年の最後の引退試合なんかで、唯一昂だけがレギュラー

として試合に出ていることがあった。二年を抑えて試合に出るわけだから、昂に押し掛かるプレッシャーは相当なもんだったと思う。

試合は最後までどっちに転ぶか分からない状況で、周りもますますヒートアップしていった。

完全にアイツからは笑顔が消えていて。

残り8秒というところで、俺は流れを断ち切るためにタイムをとった。

点差はわずか1点という僅差でうちの学校が負けている。

プレイヤー達だけではなく観客席にまで広がる重々しい緊迫した空気が。

「くそっ…」

試合に出ている二年のひとりがそう呟き、悔しそうに唇を噛んだ。他の選手たちもどこか半ば諦めモードに入ってしまったている。

だが、そうなってしまうのも仕方がないのかもしれない。

時間もあと少ししか残ってないし…

その上、相手はかなりの強豪チームだ。今から逆転するのはほぼ不可能といって等しい。

奇跡が起こらない限りありえないだろう。

ここまで粘れただけでも大健闘じゃないのか？

だが、そう思ったのが間違いだと気付かされたのはアイツの表情を捉えた時だった。

アイツだけは、唯一諦めてなんていなかった。

それどころか、闘志の炎は瞳から消えることなくむしる強まっているように思える。

見たことのないような真剣で固い眼差し…

あっという間にタイムの時間が終わり、残り8秒の試合が再開された。

昂のもとに回ってきたボールは、次の瞬間、ゴールを目掛けて放たれていた。

会場にいる誰もがボールの行く末を息を呑んで見つめる。

そして。

どっと沸きあがる会場内。

大歓声に押されるようにして、試合終了の笛が鳴らされた。耳を塞ぎたくなるほど会場に広がる歓声を背に、俺はただ呆然としてコートを見つめる事しか出来なかった。

アイツは見事やってのけたのだ。

奇跡というヤツを ……

「信じらんねえよなあ…」

あの時…大人のプライドとかそんなもん関係なく、まだ俺にとつてガキだと思ってた高校生のアイツを男の自分ですら羨ましすぎるほど格好良いと思った。

そりゃ女も惚れるワケで…

昂の傍に寄ってたかる女は山ほどいるはず。

だからアイツに女がいるのは、当然といえば当然の話なのだが…

俺は アイツは波風のことが好きなんだと思っていた。

ふとした瞬間、アイツの視線はいつも彼女を追っていたから。

彼女…波風だったら何となく分かる気がした。

波風は昂と同様、女子バスの方のキャプテンをしていて、教師の俺としても頼りがいのあるヤツだ。

男子に見間違えそうになる容姿は、よくよく見ると顔立ちも綺麗だし、線も細く女らしい身体つきをしていると思う……。 って俺が言つとセクハラっぽいが。

波風も波風で、昂の姿を意識しているのが分かったし、二人はいわゆる「両思い」って奴だと思っていた。

この二人なら周りも納得するだろう…と。

だが櫻坂と抱き合ってたって事は……俺の勘は外れていたってことなのか？

アイツ…実は櫻坂のことが好きだったってことなのだろうか？

「……………わっかんねえ……………」

思わずぽつりと眩きを漏らす。

まあ、そうは言っても…所詮『生徒』の色恋沙汰だ。

『教師』の俺としては黙って見守ることぐらいしか出来ない。

吸い込まれそうなほど果てしない夜空をじっと見つめながら、小さく息を吐き出す。

な…
そういや、さつき波風と暁が凄いい勢いで階段を駆け上った

こんな夜だつてのに忙しい奴らだな…なんて鉢合わせたときは香気にそんな事を考えていたが。あれは相当焦っていた様子だし、何かあったのだろう。

何も起こらず無事に済むといいんだが…

「勇？」

突然背後から声をかけられ、我に返った俺は現実に意識を引き戻した。

振り返ると、俺の長年の悪友とも言える拓弥の姿がそこにあった。

「…お前か」

「そんな縁側に座って…風邪引くよ？」

「…ばーか。夏だし平気だろ」

「馬鹿は酷いな…。一応それでも僕としては心配してるつもりなんだけど」

拓弥は苦笑すると、俺の隣にゆっくりと腰掛けた。

訪れる静寂の間。

心地よい夜風がふたりの間を通り抜けていく。

「なあ…」

「ん？」

「俺たちつてさ…若い頃、どんなだっけ」
「なに、藪から棒に」

クスクスと小さく笑い声を上げてから、拓弥は昔を懐かしむように空を仰いだ。

それに倣って、俺も空を見上げる。

夜空に散りばめられた星たちは奔放に煌いていた。

「あの頃はさ…早く大人になりたいっていつも思ってたけど。いつのまにか僕たちこんなにおジサンになっちゃったよねえ…」

隣で拓弥はそう小さく呟くと、微かに微笑んだ。

「バカ…言うなってそういうこと。つか、お前なんて結婚したしな」

「…早く勇もそういうひと見つかるといいね」

「うっせ」

小さく二人で笑い合う。

ポケットから煙草を取り出し、火を点けようとライターを探っていると、拓弥が自分のライターを差し出してきた。

……コイツって昔からさり気無く気がきくよな……

サンキュ、と礼を言って有難くライターを受け取る。

本人は何も言わずに自然にやってのけるから、意外とそれに気付けないことが多い。

だが振り返ってみるとそういう事が幾度となくあったように思える。拓弥との付き合いも長えもんなあ…
かれこれ10年以上になるのか？

ゆっくりと吐き出された白い煙は、たちまち夜空に紛れこんでいった。

「でもま…ホント、アイツら見てると俺も年とったよなって実感するよ」

「ああ…分かる分かる。なんかあの子達見ていると、青春してるなあって感じたよね。ちょっと羨ましいかも」

「生意気だけどな」

「若いうちは皆そんなもんだって。けど勇は何だかんだ言って可愛いと思ってるんだろ？」

「……まあな」

素直に認めた俺のことが珍しかったのか、拓弥がきよんとして見返してきた。

ちよつとばかり照れ臭くなって、拓弥を肘で軽く小突いて視線をまた空に戻す。

そんな俺に気付いたのか、拓弥は笑いを耐えるように小さく身体を揺らした。

決まり悪さを隠すように拓弥を睨み付ける。

「…あんだよ」

「クスクス…べつに？」

意味ありげに微笑む姿を見て、ちっと思わず舌打ちする。

素直に認めるんじゃないか…

でも、ま。

あの二人のこともそうだけど…

青春してる奴らを遠くから見ても悪くはねえよな。

『教師』としての醍醐味…存分に楽しませて貰おうか。

目を細めて、煌く夜空に思いを馳せる。

後日二人が付き合っているという噂がたちまち学校内に
広がり、それを耳にした彼が首を傾げるはめになったのは、また別
の話。

* E N D *

番外編 「youth」(後書き)

本編ではあまり活躍することのなかったかっしー視点でした(笑)
いかがでしたでしょうか？

実は彼、意外にも勘が鋭かったみたいです(変なところで鈍いけど…)。
本当は彼の学生時代のときのバスケの話も入れる予定だったのですが、そこまで盛り込むと延々と話が続きちゃいそうなので、あえて
きっぱりカットしちゃいました。ごめんね、かっしー(苦笑)

あとこの場をお借りして…

コメントを下さった皆様、本当の本当にありがとうございます！
!(;) ;) 感動のあまり思わず泣きそうになったほど。忙しくて
なかなか返信することが出来なかったのですが、これからぼちぼち
返信させて頂きたいと思っています。遅くなってしまう本当にご
めんなさい…;

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4376c/>

アゼリアの恋

2010年10月12日07時03分発行